

17 赤坂B遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂35-1外

(1) 立地 (第13・203図)

赤坂B遺跡は、小柳谷の堤の東側に細く延びる丘陵(標高92~56m)の北側端部に位置する。谷間には水田が若干広がる。また、調査区域の東側には北陸自動車道路が北西から南東方向に走り抜けている。Ⅱ地区は北東から東側に傾斜する標高32~35mの斜面部に展開している。

(2) 遺構と遺物

遺構は調査対象範囲内のX4~16Y1~11区から、須恵器窯2基、穴5基、溝状遺構1基が検出された。須恵器窯2基の内1基については、保存が可能であったため平面プランを確認した後に現状保存とした。

遺物は須恵器窯を中心に大量の須恵器が出土している。遺構内から出土したもの、調査時点で遺構に伴わず出土した遺物、表採資料に別けられる。

(3) 須恵器窯跡

S-01 (第204・205図・図版第39・40)

S-01の須恵器窯は調査区中央部のX8~10Y3~7区に位置し、北東方向に傾斜する斜面上に立地する。須恵器窯の南側にはSK01~04が存在し、これらの穴から本窯で生産されたと思われる須恵器が出土していることから、何らかの関係を持つと推定される。

窯体は全体に保存状況が悪く、煙出し部はすでに削平を受け消失している。規模は煙出し部を除く残存長6.80mで、幅が焚き口部で1.35m、傾斜変換部付近で1.10m、焼成部中央で1.20m、焼成部の煙出しに近い部分で0.70mとなる。床面の高さは焚き口部で標高32.60m、焼成部の残存している最高地点で標高35.00mとなり、残存部分における比高差は2.40mで、傾斜角度は燃焼部中程から窯尻までが36度である。また、焼成部の床面には階段状の平坦面が4箇所認められる。その性格は平坦面の表面が赤色酸化面であることから、須恵器焼成後に構築されたと推定され、上部が須恵器で覆われていたことから焼成直後と考えられ、焼成後の須恵器搬出作業用足場の可能性を想像することができる。焚き口部から燃焼部にかけての長さは傾斜変換点までで2.40mを測る。

前庭部はわずかに傾斜するが、東西2m×南北4.50mの範囲は平坦面を成している。灰原は前庭部の下方の取付道路ですでに削平され消失している。遺物は窯体焼成部中程と前庭部から多量に出土し、焚き口部付近の出土量は少量である。

S-03 (第204図)

S-03の須恵器窯は調査区北西部に位置し、窯体の西側半分と灰原は未調査区に延びる。S-03は埋土保存をすることになったため、今回の調査では遺構の平面形を確認するにとどまった。窯体は西側半分が未調査区に延びるため全体像は不明だが、長さ5.70m×幅0.60m以上の規模を有している。前庭部は幅1.80m以上×長さ1.60m以上の規模を有し、谷間はすでに削平を受け消失しており灰原もまた削平されている。

(4) 穴

窯体南側の1.5m付近から前庭部にかけては、東西方向に連なりSK01~04が構築されている。各穴からは当窯跡で焼かれた須恵器片が出土しており、窯に付帯する何らかの施設と判断される。

SK01 (第206図)

前庭部南東方向のX10・11Y8区にかけて位置し、標高は32~32.4mを測る。平面形は長方形を基調とし、長軸はN-34°-Wを指向する。規模は長軸2.10m、短軸1.05m、深さ0.20mを測り、底面は平坦で東壁を欠いている。埋土は褐灰色で炭化材と灰を含んでいる。

SK02 (第206図・図版第40)

前庭部南西隅のX10・11Y7区にかけて位置し、標高は32.6mを測る。平面形は隅丸の長方形で、長軸はN-23°-Wを指向する。規模は長軸0.89m、短軸0.89m、深さ0.32mを測り、底面は平坦で東壁を欠いている。埋土は褐色土で炭化材と灰を含みSK01に近似している。

SK03 (第206図・図版第40)

竈体部南脇のX10Y6区にかけて位置し、標高は33.4~33.6mを測る。平面形は略円形で、規模は上面径0.76~0.89m、下面径0.45m、深さ0.32mを測り、壁は56度の角度で立ち上がる。埋土は褐色土を基調とし炭化材や竈体の構築材を少量含んでいる。

SK04 (第206図)

竈体部南脇のX10Y6区にかけて位置し、標高は33.2mを測る。平面形は略円形で、規模は上面径0.44~0.49m、下面径0.18m、掘り込み0.21mを測る。埋土は褐色土を基調とし炭化材を少量含む。

SK05 (第205図)

調査区北東部のS-01須恵器窯の前庭部前面に位置する焼窯穴である。現状では東側が削平を受け消失しているため、長径1.35m×短径0.84mの半円形平面となっており、断面形は深さが0.40cmの鍋底状を呈する。壁面は酸化し赤褐色を呈する。

(5) 溝状遺構 (第206図)

SD01はX11-16Y8-10区にかけて位置し、地形の傾斜方向に沿って走り調査区の南端で途絶している。ここでは遺構として取り扱ったが、埋土の土層観察により自然地形の可能性も有り得る。溝内に存在する不定型の小穴群は流水による所産と考えられる。規模は現長9.2m、上面径1.1~3.2m、下面径0.2~0.9m、深さ0.6~0.9mを測り、埋土は自然堆積と判断できる。遺物は出土していない。

(6) S-01須恵器窯出土遺物

竈体内出土遺物 (第207~210図66・図版第93の1・94~97)

竈体内の床面から比較的多くの須恵器が出土している。須恵器の器種としては杯蓋・杯B・杯A・獣足・甕・短頸壺・大甕等がある。

1-13は杯蓋である。口縁部は直角に折り曲げられ、鈕は中央部がやや突出する扁平な形状である。1・3・6・9・11はロクロ整形のみ施されている。2・13はロクロ整形後天井部内面中央部に指頭によるナデ調整が施されている。4・7・10・12はロクロ整形後天井部外面に回転ヘラ削り、天井部内面中央部に指頭によるナデ調整が施されている。5・8はロクロ整形後天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。

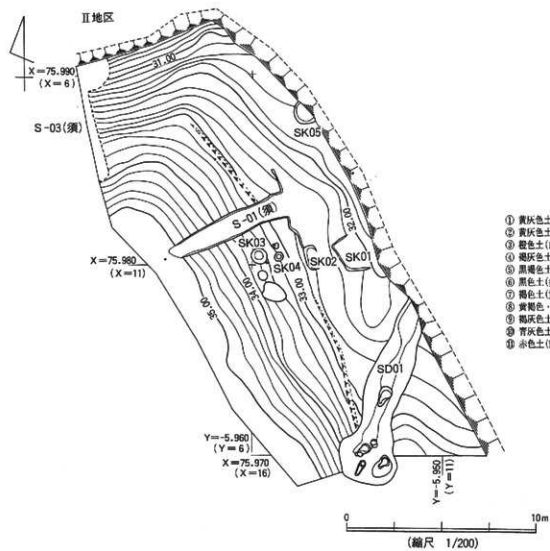
14-29は杯Bである。箱形に近い形状を呈し、口縁部がやや外反気味となり高台は矩形断面となる。

30-39は杯Aである。口径が12.8~14.2cm、底径が8.0~10.0cm、器高が3.0~3.5cmと口径の割りに器高が高くなる。30-37・39は体部から口縁部がやや直線的に開き口縁部がやや外反気味となる。38は体部から口縁部にかけて大きく外反する。

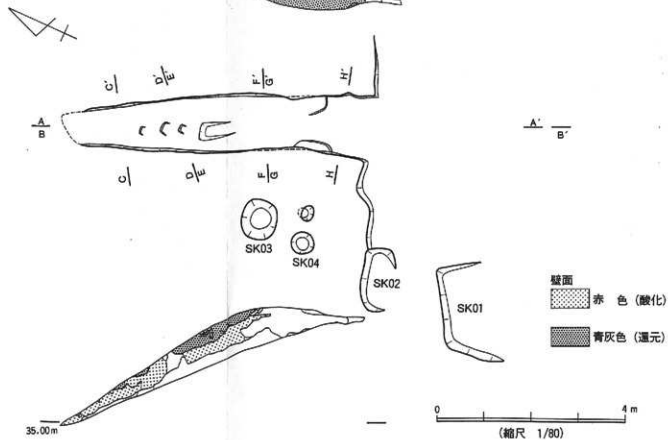
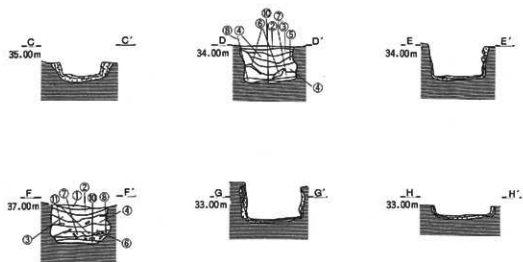
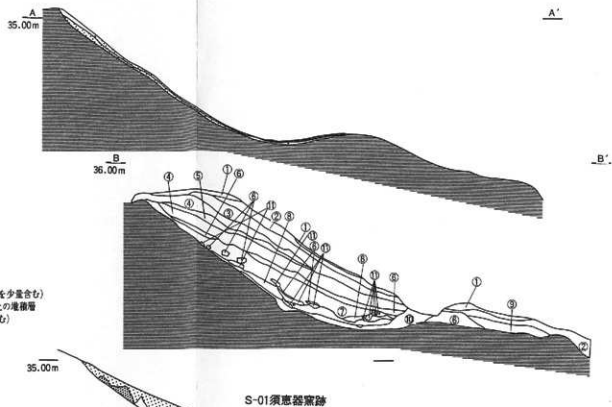
40は獣足である。ヘラ削りによって整形され指は4本の刻線により5本指を表現している。

41-44は長甕である。口縁部が「く」の字状に外反し口唇部が上方へ屈曲する。43の器面調整は外面の上半にカキ目を行い、胴部下半外面に格子のタタキ目文、内面に同心円タタキ目文が見られる。

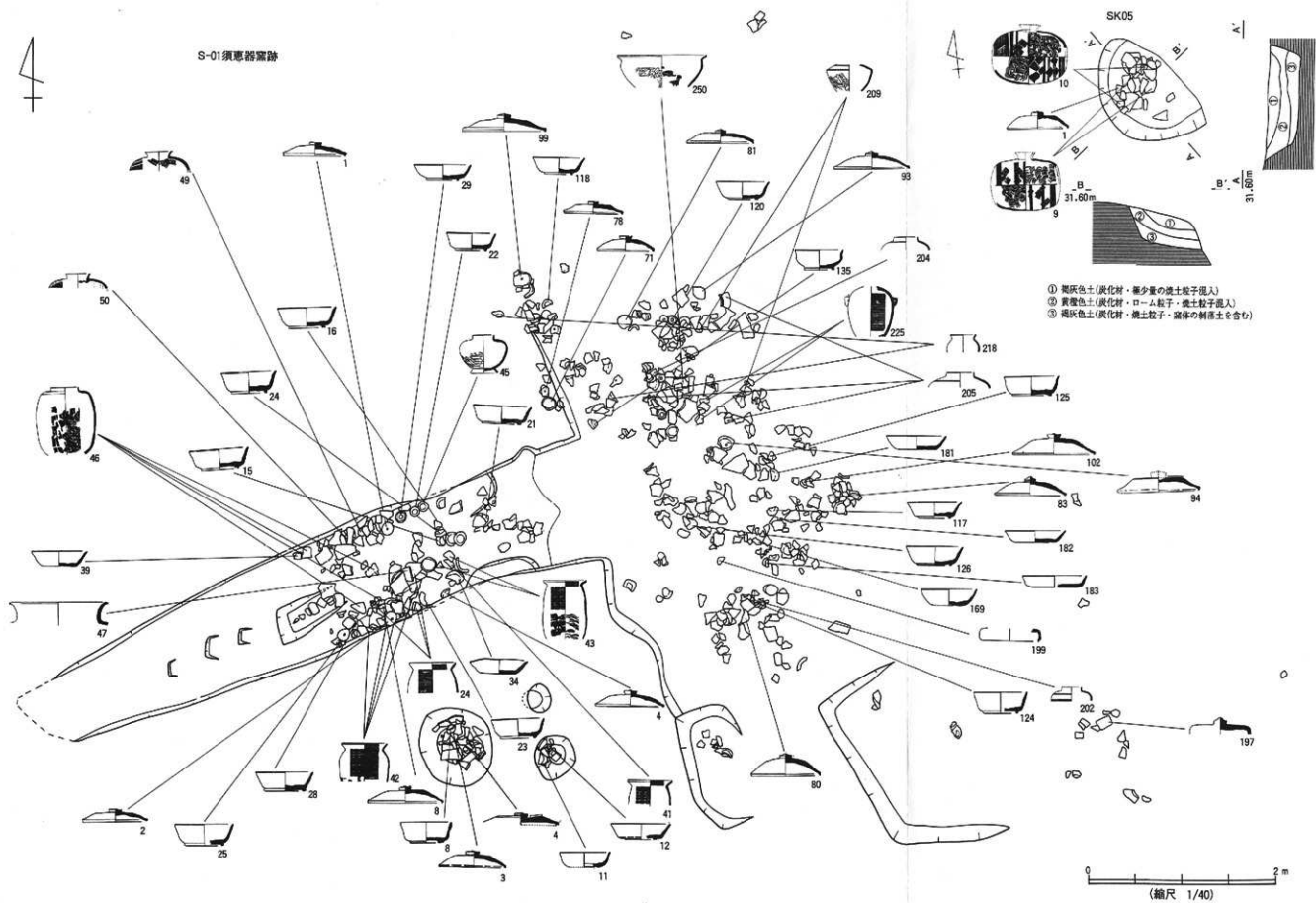
45は短頸壺である。45は高台を有し胴部は最大胴径を上位に持つ肩の張る形状を呈し、口縁部が直立し口唇部が丸く仕上げられている。ロクロ整形後胴部下半外面に手持ちヘラ削りを施す。46は直口壺で口縁部が角をなす。胴部中位以下を外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。



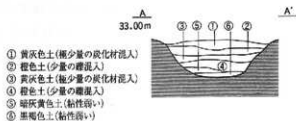
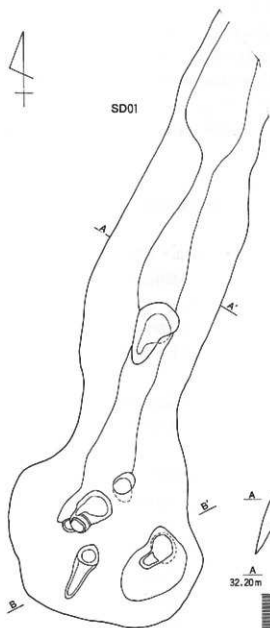
- ① 青灰色土(表土、極少量の炭化材混入)
- ② 青灰色土(少量の炭化材混入)
- ③ 藍灰色土(白粉砂質(砂-5%)を少量混入)
- ④ 褐色土(炭化材混入、全体に粒子多い)
- ⑤ 黒褐色土(炭化材混入)
- ⑥ 黒色土(多くの炭化材を混入)
- ⑦ 黒色土(黄褐色、青灰色を混する腐葉土を少量含む)
- ⑧ 黄褐色、灰白色、青灰色を呈する腐葉土の堆積層
- ⑨ 褐色土(多量の炭化材及び粘土粒子・灰を含む)
- ⑩ 青灰色土(腐葉土の腐葉土)
- ⑪ 赤色土(腐葉土の腐葉土)



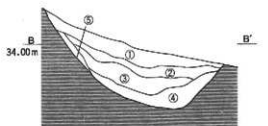
第204図 赤坂B遺跡 I地区遺構配置図 S-01須恵器窯跡



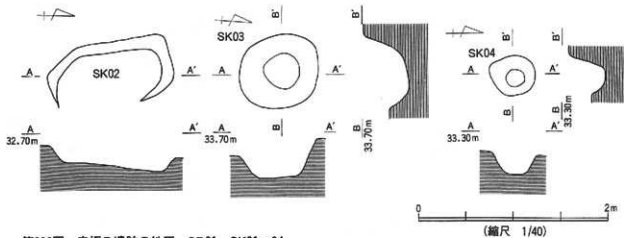
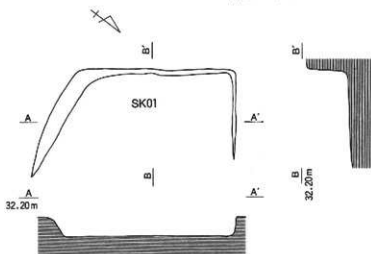
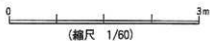
第205図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01須恵器窯跡、SK05遺物出土状況図



- ① 黄灰色土(極少量の炭化材混入)
- ② 橙色土(少量の礫混入)
- ③ 黄灰色土(極少量の炭化材混入)
- ④ 橙色土(少量の礫混入)
- ⑤ 暗灰黄色土(粘性弱い)
- ⑥ 黒褐色土(粘性強い)



- ① 黄灰色土(極少量の炭化材混入)
- ② にぶい黄色土(少量の礫含む)
- ③ 暗灰黄色土(多くの礫含む)
- ④ 黒褐色土(少量の礫含む)
- ⑤ 橙色土(粘性弱い)



第206図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 SD01、SK01～04

47・48は大甕である。47は口縁部が大きく外反し口唇部から外方へつまみ出されている。48は口縁部が大きく外反し口唇部が上方に屈曲する。胴部外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキを施す。

49～55は横瓶である。49・50は口縁部が残存する例で、口縁部はやや外反して立ち上がり口唇部が面をなしている。胴部は内面に同心円タタキ、外面に平行タタキ後カキ目調整が施される。51・52・55は胴部片で外面を平行タタキ後カキ目、内面には同心円タタキを施す。

56～66は大甕胴部片である。56・59・61・63・65・66は外面が平行タタキ、内面が同心円タタキ後平行タタキを施している。

前庭部出土遺物（第211～218・258図・図版第93の1・94～97）

前庭部から多くの須恵器が出土しており、器種としては杯蓋・杯・短頸壺・甕・双耳壺・大甕・鍋・横瓶などが存在する。

67～112は杯蓋である。口縁端部は直角に折り曲げられ鈕は中央部がやや突出する扁平な形状である。68～70・73・76～80・82・85・91・94・96・98・101・106・108・109はロクロ整形後天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。71・72・74・75・81・86・90・93・99・102・103はロクロ整形のままである。67・83・84・87・89・92・95・105・107・110・111はロクロ整形後天井外面に回転ヘラ削り、天井部内面中央部に指頭によるナデ調整が施されている。99・104・106・112はロクロ整形後天井部外面に回転ヘラ削り、天井部内面中央部に指頭によるナデ調整が施されている。また、78には天井部内面に「×」のヘラ記号が認められる。

113～146は杯Bである。113～134は箱形の形状を呈し口径が10.2～12.2cm、器高が3.7～4.6cmとなる。135は体部中位で「く」の字状に屈折し口縁部は大きく外反する。136・144は高台付の底部破片である。145・146は箱形の形状を呈し大型な例である。

147～173の杯Aは口径が10～13cm、器高が3～4cmと口径に対して器高が高い杯である。174・185の杯Aは口径が13cm前後、器高が3cm以下と皿に近い形状を呈す。182には「一」のヘラ記号が認められる。186～195は杯Bの体部から口縁部の破片である。186を除き大型の杯Bと思われる。

196は獣足と思われる。ケズリ整形を施す。

197～199は短頸壺の蓋である。197は擬宝珠形の鈕を有し198・199は端部が段となる。200～206は短頸壺である。口縁部から胴上半部の破片で、口縁部は短く直立し胴部は最大径を上位に持ち肩部が丸みを有す。207・215は壺類の破片である。207・208は胴部の破片で胴部外面下半に手持ちのヘラ削りが施される。209は胴部破片で肩部が角張り、胴下半部外面に手持ちヘラ削りを施す。210は胴下部破片で丸みを持つ胴部である。211～215は瓶類の高台部片と思われる。

216は広口壺の口縁部片と思われ、大きく外反し口唇部が上方につまみ出されている。

217は高杯脚部片である。内面に絞り目が認められる。

218～223は甕類である。218は小形の球胴状に近い形状を呈しロクロ整形である。219～223は長甕で口縁部が「く」の字状に外反し口縁部が上方へ屈曲する。ロクロ整形である。

224～228は壺・甕類である。224は直口壺の底部と思われる。胴部下端の外面に削り、内面にナデが施される。225は双耳壺である。胴部は上半が強い丸みを有し、把手は台形の板状を呈し中心部に穴を有す。226は長甕の胴部片と思われる。胴下部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。227は直口壺の胴部片である。228は甕あるいは壺の胴部片で胴下部外面にヘラ削りを施す。229は甕の胴部片と思われ、外面に平行タタキ目文が認められる。

230～246は大甕である。230～232は口縁部が大きく外反し、胴部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。223・245・246は胴部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。234～244は胴部外面に平行タタキ、内面に同

心円タタキ後平行タタキを施す。

247～251は鉢類である。体部から口縁部は大きく外傾し口唇部は面をなす。ロクロ整形後体部下外面にヘラ削りを施す。249は胴部中位に最大径を有し丸く張り出し、口縁部は外傾し口唇部は上方につまみ出されている。胴下部外面はヘラ削り、内面はハケ目調整が施される。250・251は胴部が張り、口縁部は最大径を有し外傾して立ち上がる。胴下部外面はヘラ削りが施される。

252～258は横瓶の胴部破片である。252～254は外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキを施す。255～257はカキ目が施される。258は内面に同心円タタキ、外面に平行タタキが施されている。

その他のS-01須恵器窯出土遺物（第219～221図352・図版第93・94）

器種としては杯蓋・杯B・杯A・短頸壺・瓶類・大甕などが存在する。

259～275は杯蓋である。口縁部は直角に折り曲げられ、紐は中央部がやや突出する扁平な形状である。259・260・263・264・268・270は外面の天井部にロクロナデ調整のみ施されている。261・262・265～269・271～274は外面の天井部を切り離した後につまみを付けヘラ削りが施されている。265は天井部内面中央に指頭によるナデが施されている。

276～296は杯Bである。276～290は体部が直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反気味となる。口径が9.2～12.4cmとなり、器高が4.1～7.1cmとなる。296は口径が14.6cm、器高が7.0cmと大型で、内底面にナデ調整する。

297～327は杯Aで、体部から口縁部がやや直線的に開き、口縁部でやや外反気味となる例が多いが、316のように大きく外反する例もある。口径が10.2～13cm、器高が2.7～3.8cmである。

329～331は短頸壺の蓋で、受け部が段状になる。332は短頸壺で、胴上部は丸みを有し、口縁部は内傾して直線的に短く立ち上がる。328・333～335は瓶類の口縁部破片である。328は直線的に外傾して開き、口縁部でやや外反する。333・334は短く外反し、口縁部が角をなすことから横瓶の口縁部と思われる。335は口縁部が大きく外反し、口唇部が上方につまみ出され、広口壺の口縁部と思われる。336は瓶類の胴部破片である。丸みの強い胴部を呈す短頸壺。337・338は横瓶で、外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施されている。339～341は横瓶の胴部片と思われ、外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキが施されている。

342～352は大甕の胴部破片である。342は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施されている。343・344・346～352は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキ後平行タタキが施されている。345は外面に平行タタキ、内面に放射状のタタキ文が施されている。

(7) SK02～05出土遺物（第222・223図・図版第92）

1は鉄滓でSK02から出土している。2～7は杯蓋で全てSK03から出土している。2は天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。3・5・6はロクロ整形のままである。4・7は天井部外面に回転ヘラ削り、内面に指頭によるナデが施されている。8～12は杯Bで8～10はSK03、11・12はSK04から出土している。8・11は箱形に近い形状を呈す。9・12は底部片である。12は体部から口縁部片である。13は甕で、胴部は最大径を上位に持ち、口縁部は「く」の字状に外傾し、口縁部で上方に屈折する。14は横瓶で、胴部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施されている。15は大甕胴部破片で、内外面ともに平行タタキ文が認められる。

SK05の焼壺穴からは杯蓋・杯・獣足・横瓶・短頸壺・大甕などが出土している。

1・2は杯蓋で、1はロクロ調整後、天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。2は口縁部破片である。3は杯Bである。4は杯Aで体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。5は獣足と思われる。

6～10は横瓶で、6は口縁部片、9・10は胴部外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキが施される。

11は器種不明の須恵器である。球状を呈し、内面に隆起した帯が存在し、外面に平行タタキ文が見られる。

12は瓶類の口縁部破片である。13は長胴の短頸壺の胴下部片で、胴部は外面に平行タタキ後下端を削り、13・15は

内面に放射状のタタキ文が施されている。14・16は大甕の胴部破片で、外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが施されている。

(8) 遺構外出土遺物 (第224～229図187・図版第92)

1～60は杯蓋である。口縁端部は直角に折り曲げられ、鈕は中央部がやや突出する扁平な形状である。1・2・7・8・14・16・25・28・30・31・38・44・52はロクロ調整後、天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。3・5・6・11～13・15・17～24・26・27・34・35・41・45・47～49・54はロクロ整形のみ施されている。4・10・32・33・37・39・40・42・43・46・50はロクロ調整後、天井部外面に回転ヘラ削り、天井部内面中央部に指頭によるナデが施されている。53・54は著しく変形した例である。59は天井部の中位に隆起線がめぐる。60は重ね焼きの状態である。

61～95は杯Bである。箱形に近い形状を呈し、口縁部がやや外反気味となり、高台は矩形断面となる。61～84は口径が12.0～12.2cm、器高が3.7～4.7cmと小形で、85～89は口径が9.4～12.4cm、器高が4.5～5.1cmと中型で、90～94は口径が14.0～16.0cm、器高が6.5cm前後と大型である。95は窯壁が融着した杯Bである。138は杯B若しくは杯Aの口縁部破片である。143～150は杯Bで口径が14.0～16.0cm前後、器高が6.0cm以上の大型である。

96～135は杯Aである。体部から口縁部は直線的に開き、口縁部でやや外反する。96～127は口径が10.8～13.8cm、器高が3cm前後となる。128～132は口径が13cm前後、器高が2.5～3cm前後と皿状になる。133・134は底部片である。135は重ね焼きの状態である。

136は獣足で、ヘラ削りにより整形されている。137は焼台で、胴部は算盤玉形を呈し、口縁部は大きく外傾する。139～142は瓶類の底部片である。

151～160は短頸壺の蓋で、天井が水平で、口縁部が垂直となる。151・152・159は受け部が外側へ張り出す。153・154・156・157・160は受け部が段状となり内屈する。155は受け部がない。

161～164は短頸壺で、直立して立ち上がる短い口縁部を有し、胴上部は丸みを有す。165は広口壺の口縁部片である。

167は長甕で、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方につまみ出されている。

168・169・177・178は鉢で、胴部の最大径を上位に持ち、口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部が上方につまみ出されている。177は胴下部に削りを施す。170は小形の甕である。丸みの強い胴部を有す。

172～176は大甕である。172～174・176は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキを施す。175は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキ後平行タタキを施す。

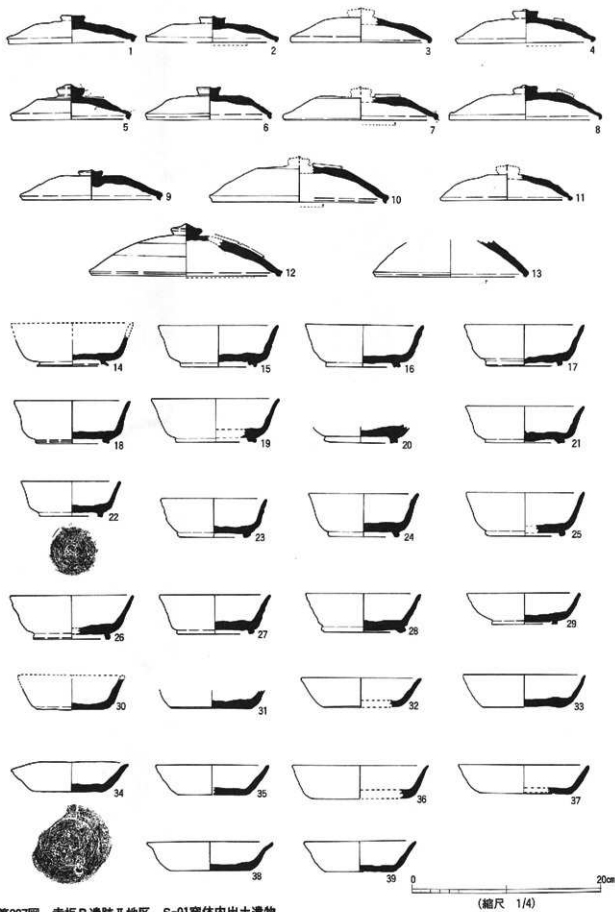
171・179～187は横瓶である。171は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施されている。179～181は卵形の胴部を呈し、胴部外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキを施す。182～184は楕円形の胴部を呈し、胴部外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円タタキ後叩き目を施す。

(9) 表探遺物 (第229・230・48図・図版第91の2)

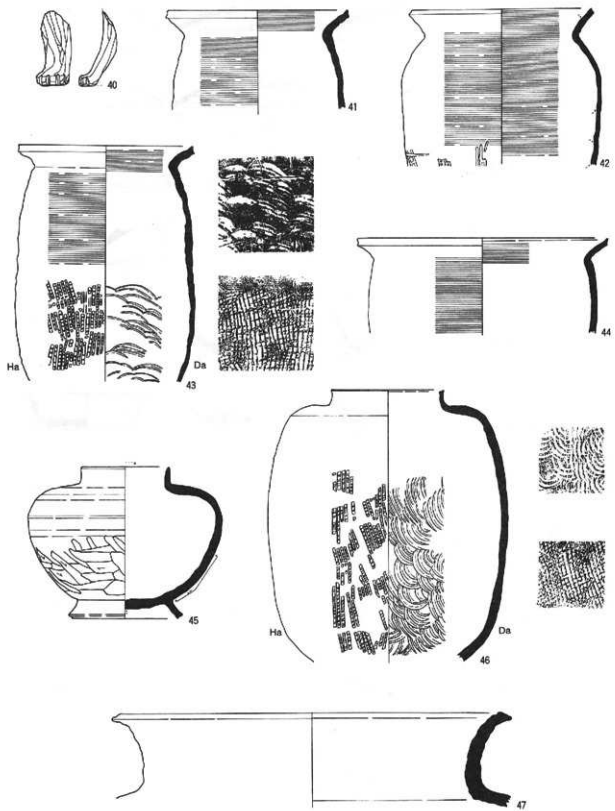
1～7は杯蓋である。口縁端部は直角に折り曲げられ、鈕は中央部がやや突出する扁平な形状である。1・3～5はロクロ調整のみ施されている。2・7はロクロ調整後、天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。6はロクロ調整後、天井部内面中央部に指頭によるナデが施されている。

8～19は杯Bである。箱形に近い形状を呈し、口縁部がやや外反気味となり、高台は矩形断面となる。15～19は口径が10.2～13.6cm、器高が4.2～5.0cmとなる。20～36は杯Aで、体部から口縁部は直線的に開き、口縁部でやや外反する。口径が10.6～12.6cm、器高が3.0～3.5cmとなる。37～39は口径が12.4～13.8cm前後、器高が2.2～2.5cm前後の皿状となる。40は短頸壺の蓋で、受け部が外方に延びる。41は短頸壺で、直立する短い口縁部を有す。42は瓶類の口縁部片である。43・45は長甕で、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上方につまみ出されている。44・46は大甕の胴部片で、44は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施されている。47は横瓶の閉塞部である。48は双耳壺の耳片で、上部に孔が認められる。

(肥田・折原)



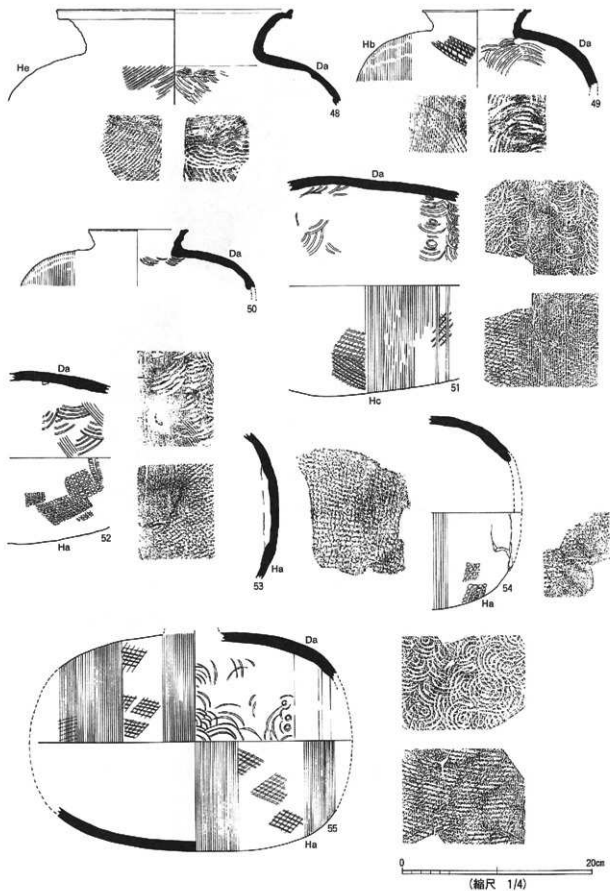
第207図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01竈体内出土遺物



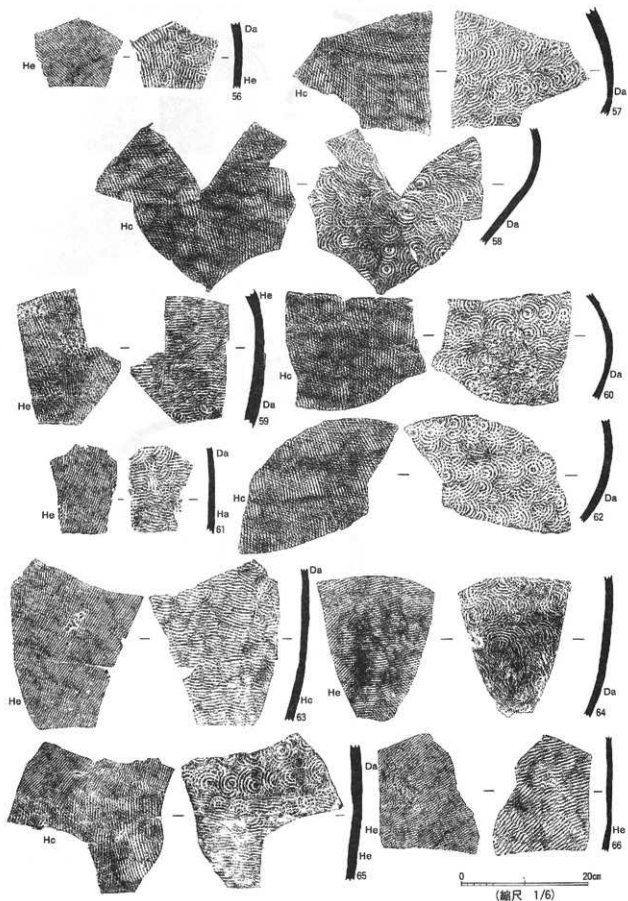
0 20cm

(縮尺 1/4)

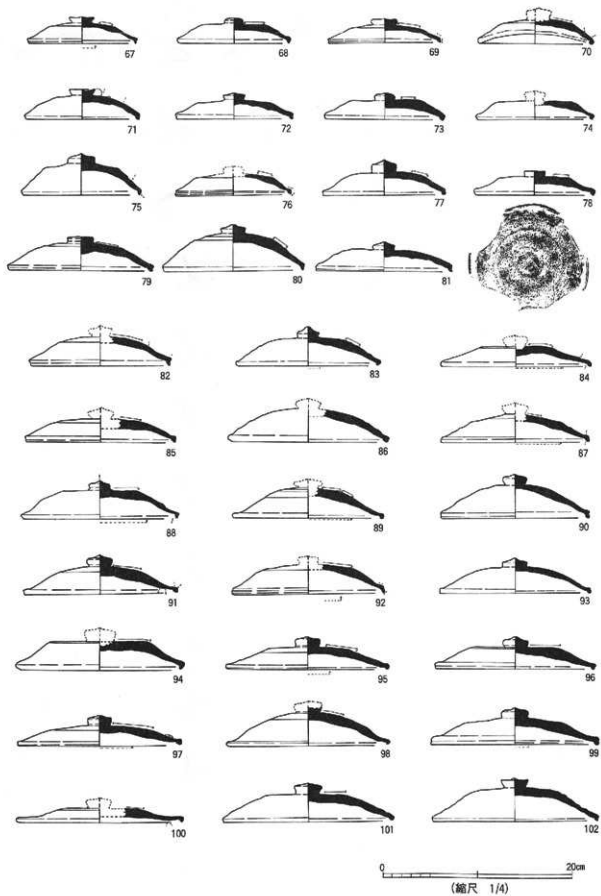
第208図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01窯体内出土遺物



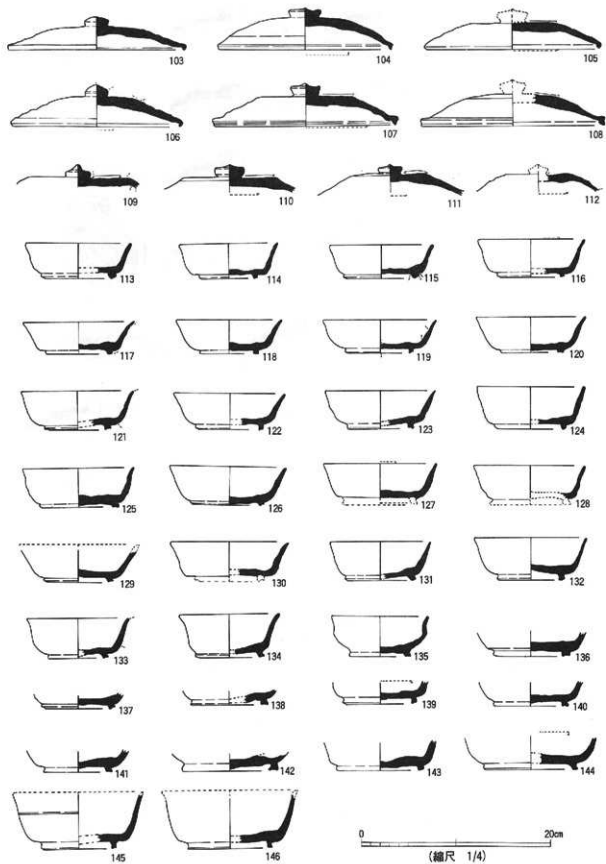
第209図 赤坂B遺跡I地区 S-01窯体内出土遺物



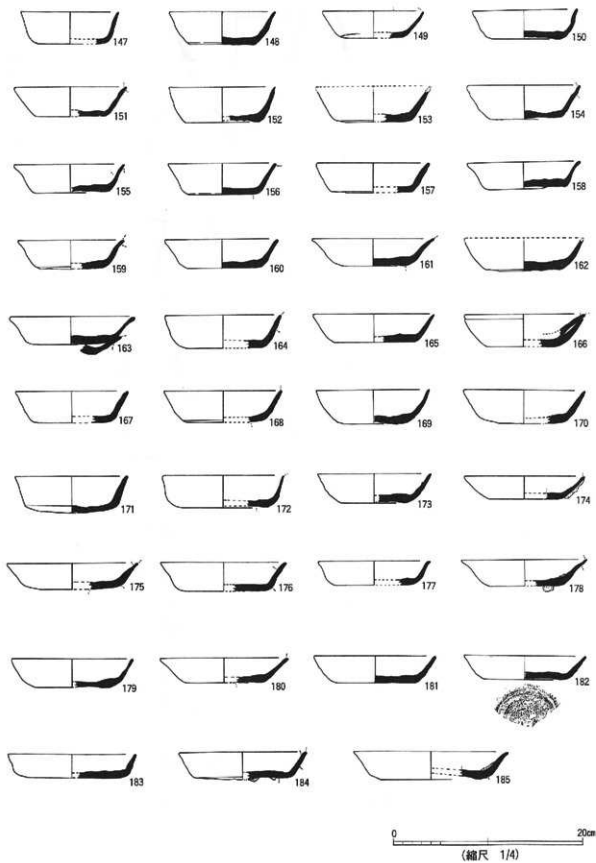
第210图 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01窟体内出土遺物



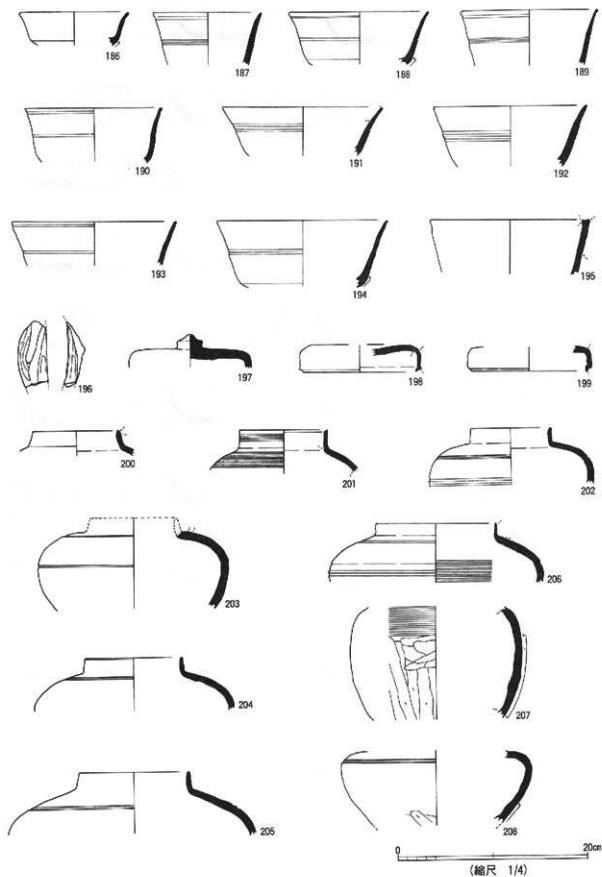
第211图 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前庭部出土遺物



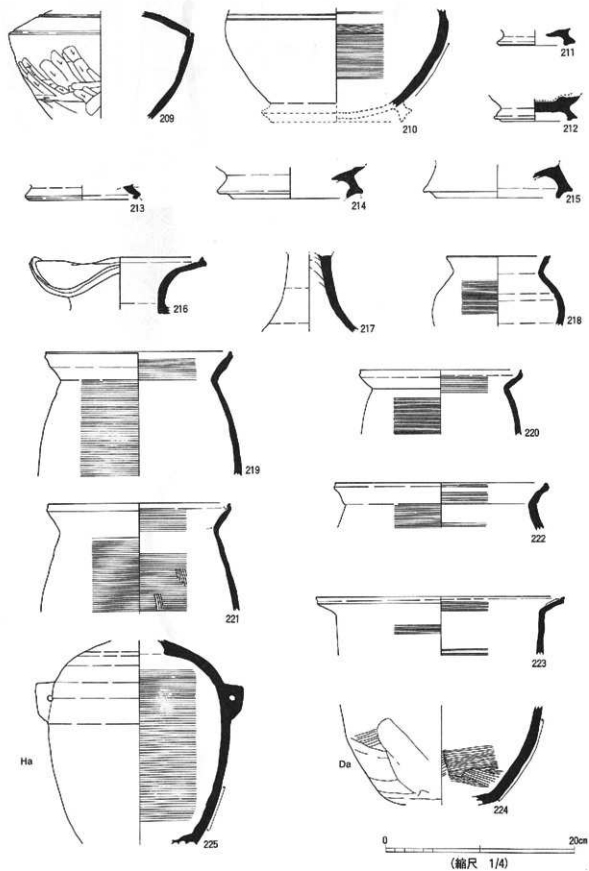
第212図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前底部出土遺物



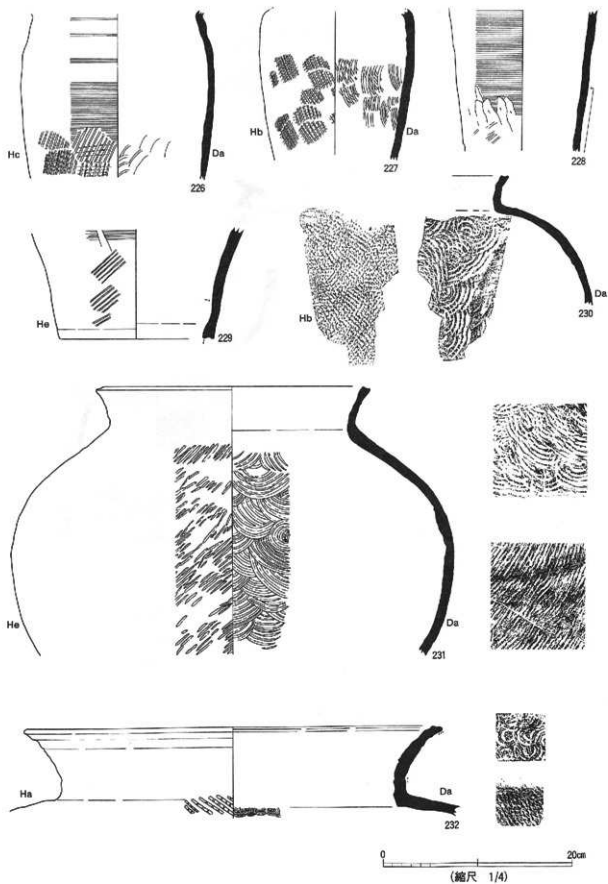
第213図 赤坂B遺跡Ⅰ地区 S-01前庭部出土遺物



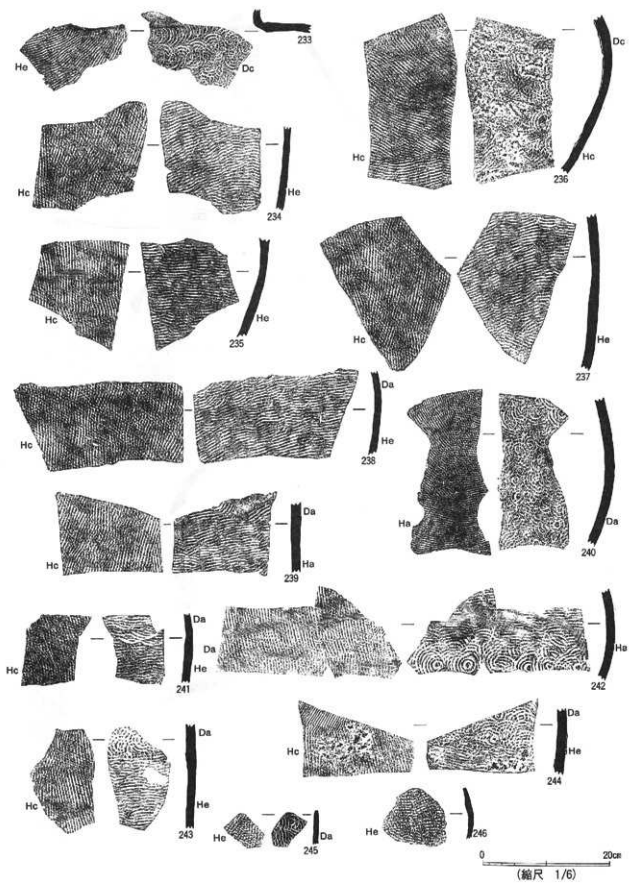
第214図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前底部出土遺物



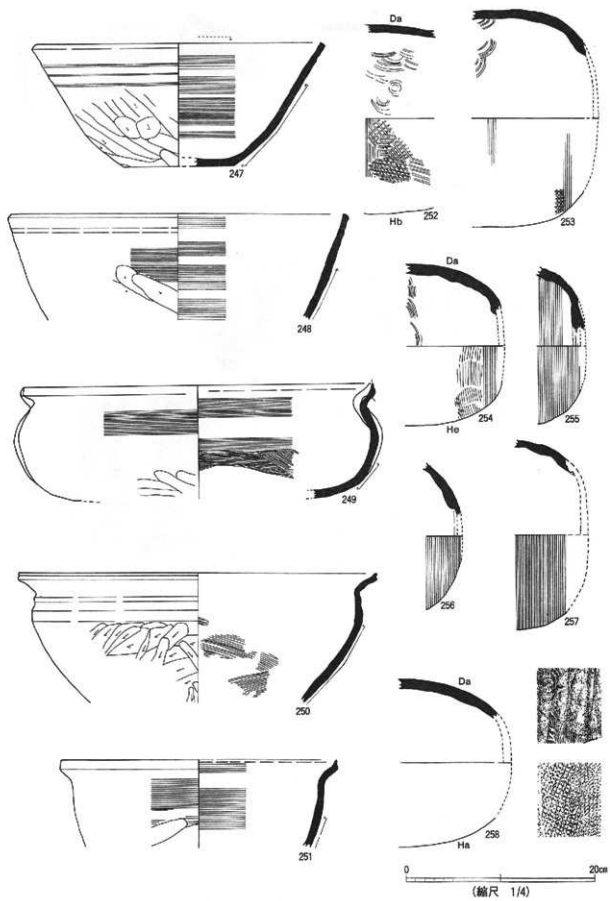
第215图 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前底部出土遺物



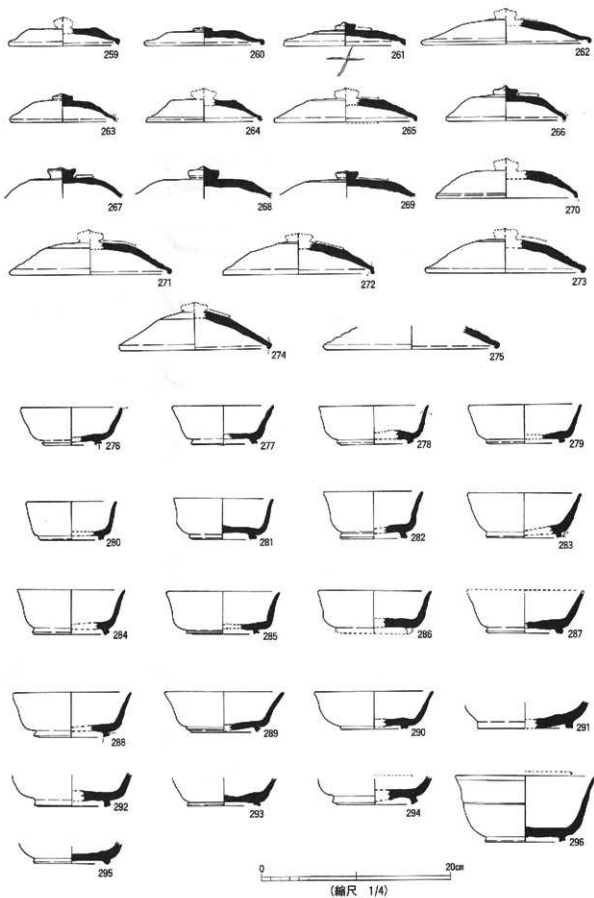
第216図 赤坂B遺跡Ⅰ地区 S-01前底部出土遺物



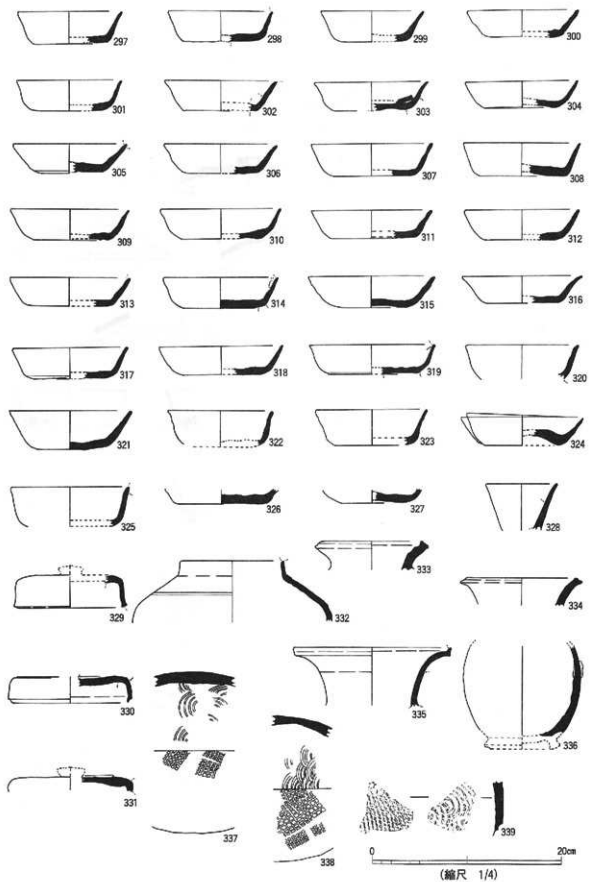
第217図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前庭部出土遺物



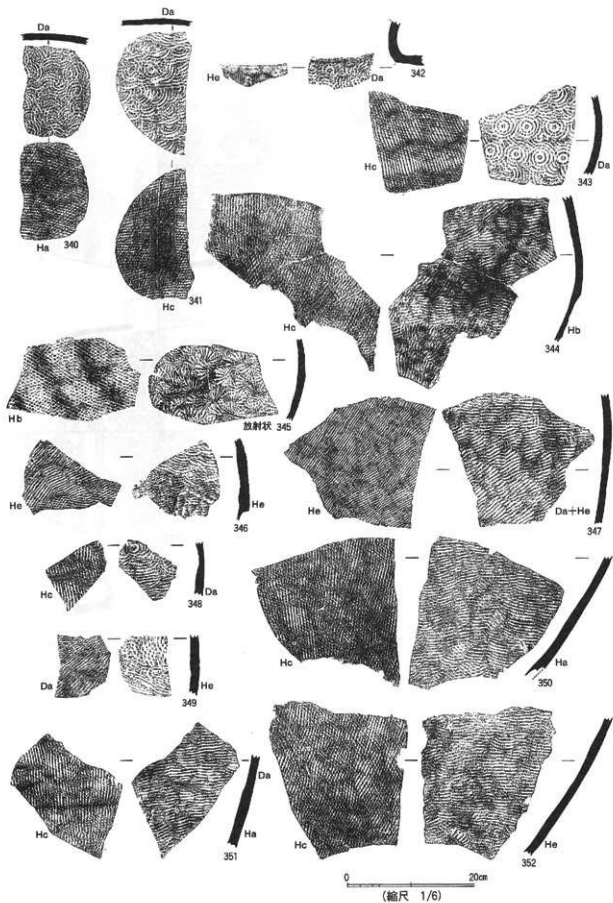
第218図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01前底部出土遺物



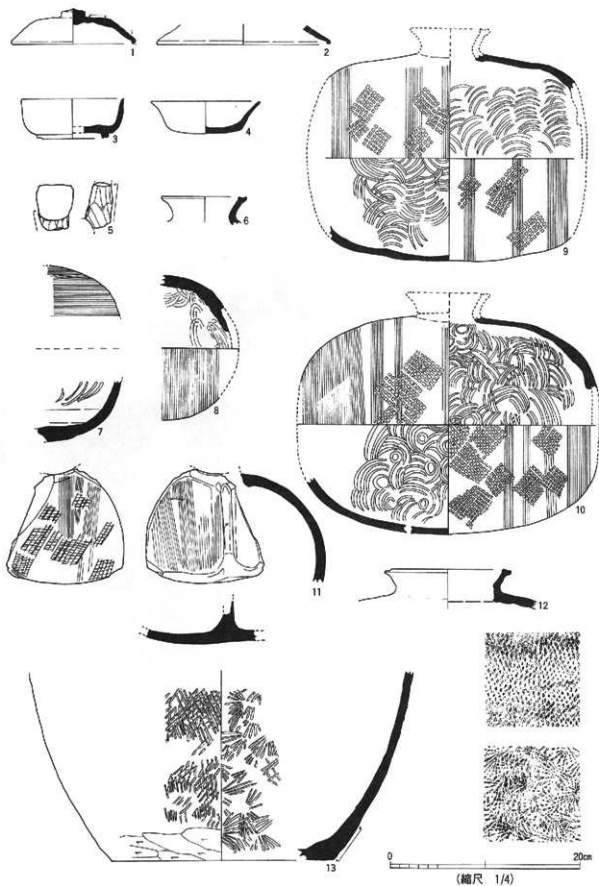
第219图 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01出土遺物



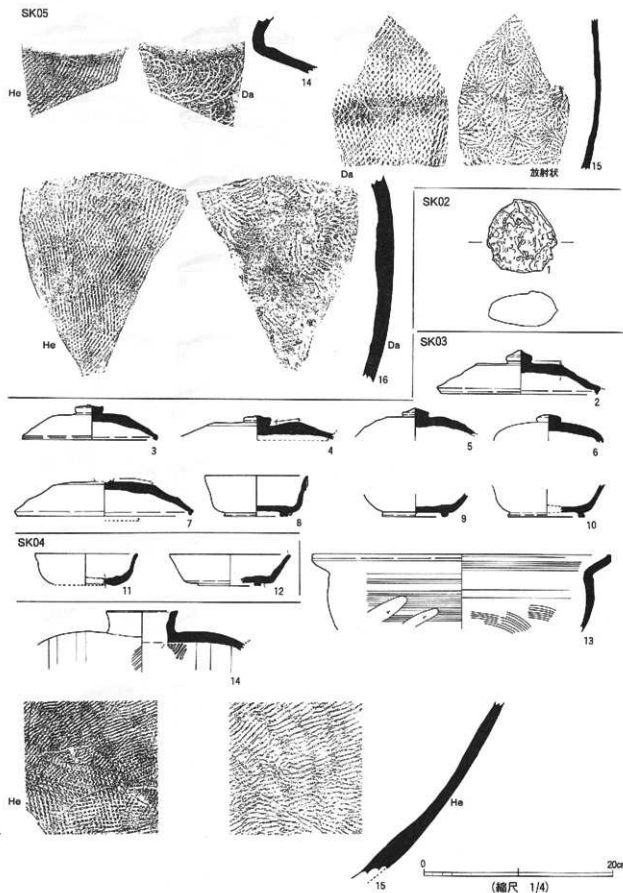
第220図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01出土遺物



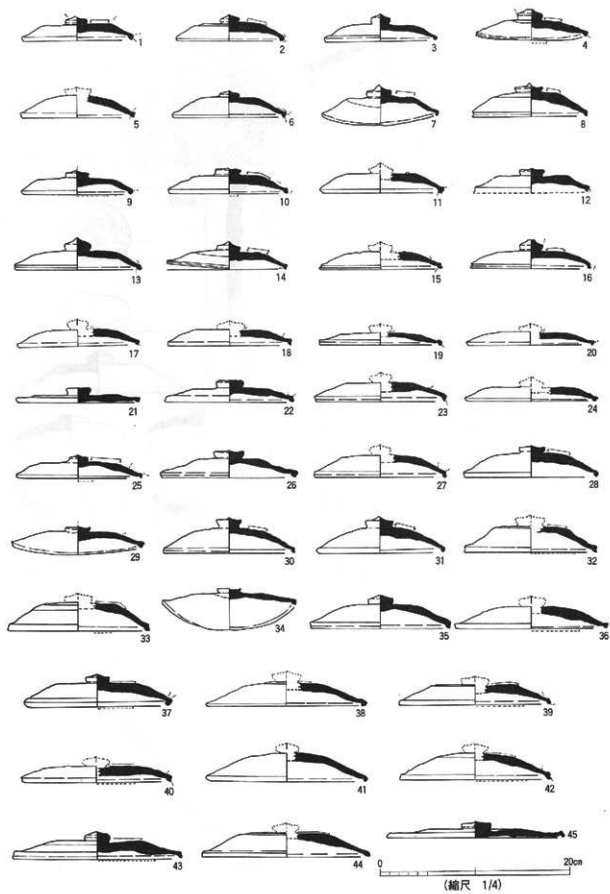
第221図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 S-01出土遺物



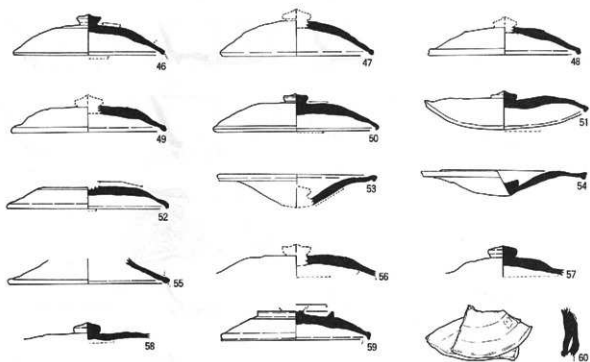
第222图 赤坂B遺跡I地区 SK05出土遺物



第223図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 SK02~05出土遺物

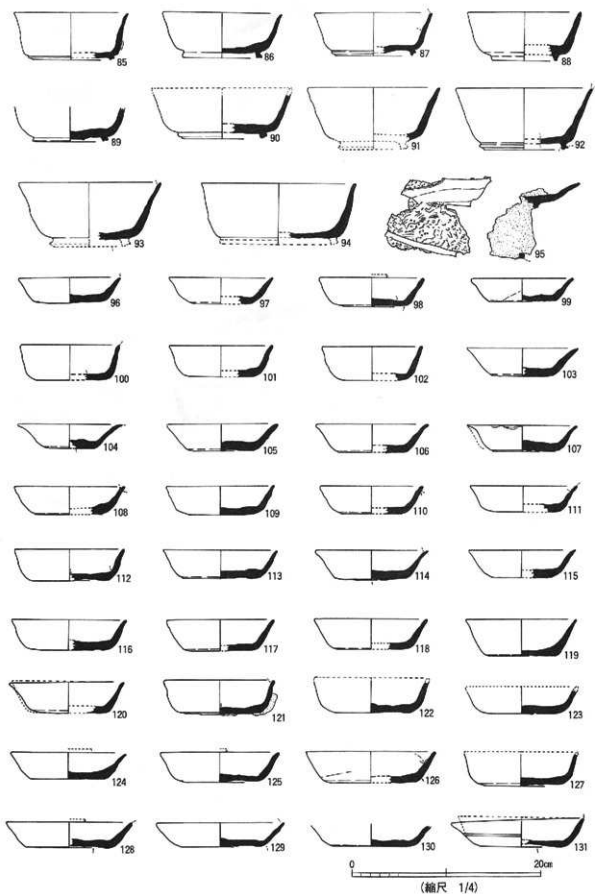


第224図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 遺構外出土遺物

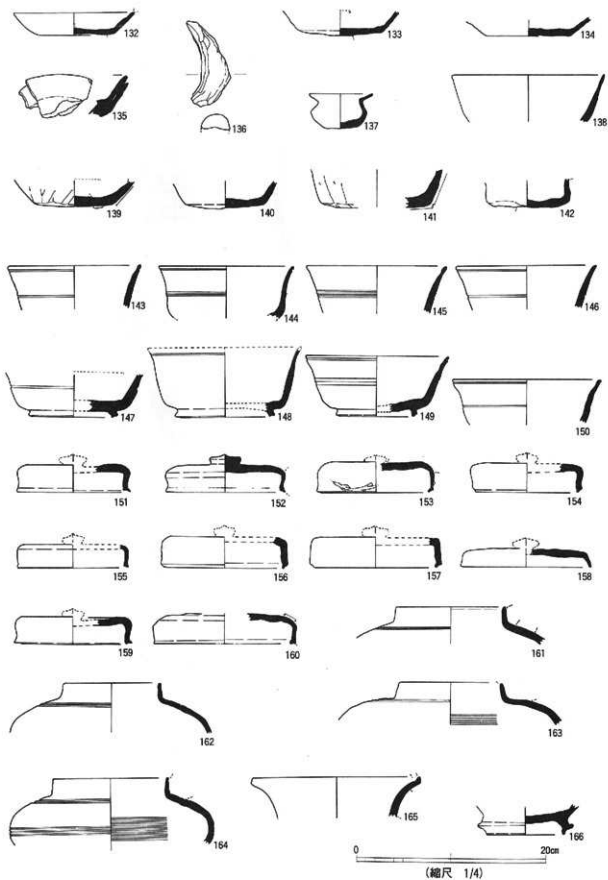


0 20cm
 (縮尺 1/4)

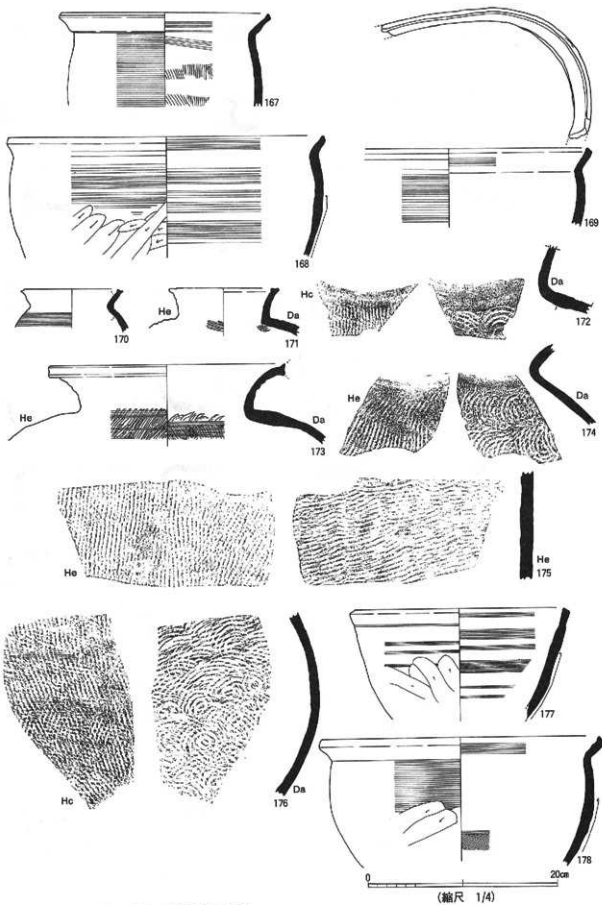
第225图 赤坂B遺跡I地区 遺構外出土遺物



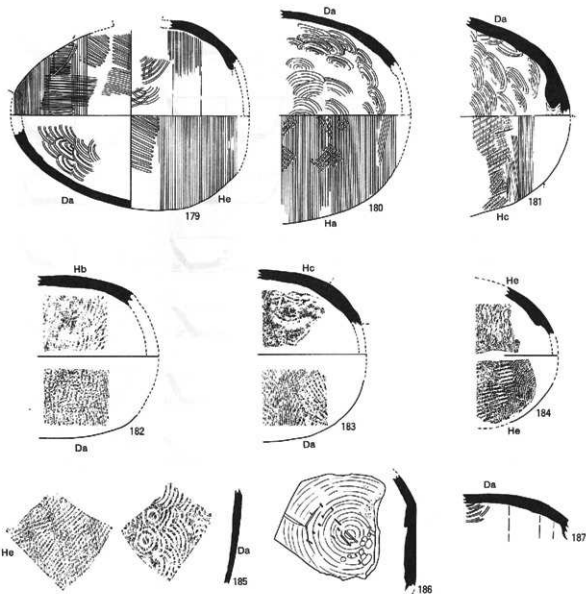
第226図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 遺構外出土遺物



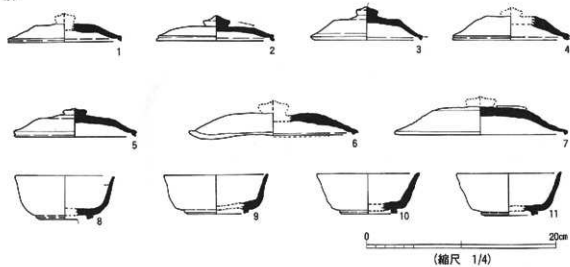
第227図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 遺構外出土遺物



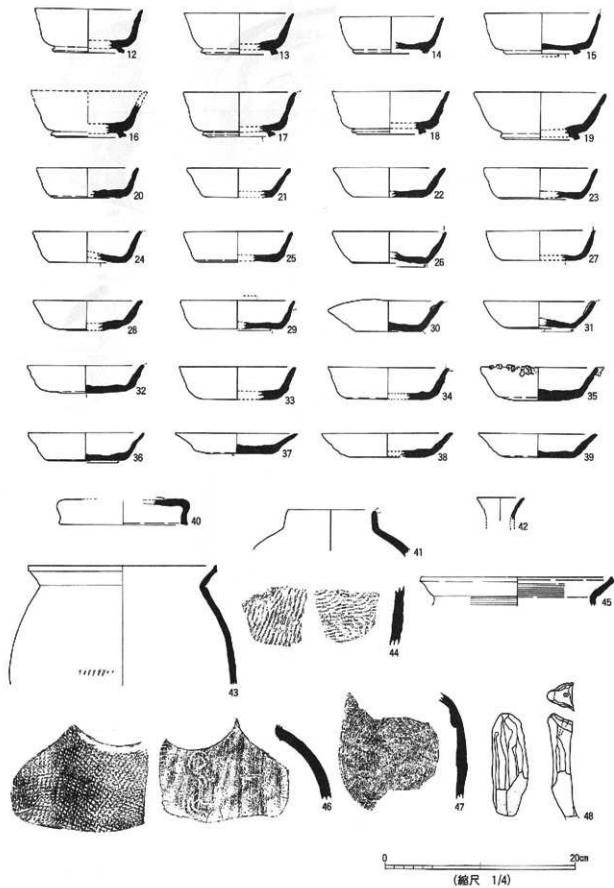
第228图 赤坂B遺跡II地区 遺構外出土遺物



表探



第229図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 遺構外・表探出土遺物



第230図 赤坂B遺跡Ⅱ地区 表採遺物

18 赤坂D遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂22-1外

(1) 立地 (第43図)

赤坂D遺跡が位置する丘陵は、標高80m南北に細長く延び幅約220mを測り、谷頭より350m入ったところに小柳谷上・下堤があり、溝面に水を湛えている。赤坂D遺跡はその西斜面に展開されたⅠ～Ⅴ地区の総称である。

Ⅲ地区は小柳谷上・下堤のほぼ中間X75.680Y-5.820区に位置し、標高42.00mの西斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物 遺構は炭焼窯1・穴1・溝1で、遺物は出土していない。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第231図・図版第41)

Ⅲ地区は調査区内でわずかに隆起する地形の部分があり、その丘陵頂部状となった尾根に沿ってS-01は構築されている。S-01は長さ9.3m以上、幅は奥壁付近で1.0m、中央で1.0m、焚き口付近で1.0mのパチ状を呈する半地下式の炭焼窯であるが、窯体両端部は削平され全貌は明らかでない。床面には排水溝はなく、傾斜は全体を通してほぼ6度を保持している。煙出しは北壁側に2箇所、南壁側に1箇所、奥壁は削平され不明となっている。各煙出しの底面は窯体床面より低く掘られている。窯体の色調は、床面と奥壁側の煙出しを除きそれぞれ黒色化している。遺物の出土はない。

(4) 穴

SK01 (第231図・図版第41)

SK01は調査区北東端の標高42.00mに立地し、工事用道路により削平され全貌は明らかでない。復元径は0.8m、深さ20cmの規模を有する。下層には炭化材を含むが被熱痕はない。遺物の出土はない。

(5) 溝

SD01 (第231図)

調査区斜面上端に位置し、S-01の奥壁を切っている。幅1.8～3.2m、長さは調査区内では14mを測る。覆土は黄褐色砂粒の互層となり締まりがないところから、新しいものと思われる。遺物の出土はない。

19 赤坂D遺跡Ⅳ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂22-1外

(1) 立地 (第43図)

Ⅳ地区はⅢ地区の南100m、小柳谷上堤のほぼ中程X75.590Y-7.580区に位置する。赤坂D・E地区を形成する標高80m程の丘陵は、小柳谷上・下堤付近では標高60mとなり、急峻な地形から緩やかな起伏となる。この丘陵の西斜面は緩やかで、浅い谷が樹枝状に入り込んでいる。Ⅳ地区は標高40m付近で工事用道路を挟み小柳谷上堤に面している。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯1、焼窯穴1、穴5である。遺物は遺構からではなく、周辺より鉄滓・炉壁が整理箱に1箱の量が表採され、周辺に製鉄に関わる遺構の存在が窺える。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第232図・図版第41)

S-01は等高線に対して直交して構築され、長さ5.20m、幅は奥壁で1.30m、中央部で1.25m、焚き口付近で0.70m、深さは奥壁部分で1.60m、焚き口で0.30mのパチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面は平坦であるが中央で窪んだ部分が見られ、壁側の際はわずかに高くなる。床面の傾斜は奥壁から0.60m程までが5度で、そこから焚き口までが12度となる。煙出しは両壁に各1ずつ、奥壁に1である。奥壁煙出しの煙道掘り方は、幅40cm、奥行10cm

前後で、壁側は崩落して形状を保持していない。北壁側煙出しは床面に接して幅30cm、高さ12cmの長方形の煙吸込み口が遺存し一方を円礎で支えている。外側の煙出し口は小さく径18cmとなる。南壁側は崩落して煙出し口は遺存しないが、d-d'を見るとやや窪体側に内傾するようである。色調は大半の壁が崩落し不明であるが、奥壁から側壁煙出し口付近までは床面の高さから黒色化され、そこから焚き口までの間は床面から赤色となっている。前庭部の焚き口付近には土坑状の浅い掘り込みが見られる。遺物は出土していない。

(4) 穴

S-01の北側縦斜面に位置する穴でSK03のみ焼壁穴となる。

SK01 (第232図)

SK01は長軸を東西にとる楕円形を呈し、2段にわたり掘り込まれている。長さ1.7m、幅0.4m、深さ0.15mの穴である。覆土中にはいずれもわずかに炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK02 (第232図・図版第41)

SK02は長軸を南北にとる略方形を呈し、長さ1.7m、幅0.55m、深さ0.10mの穴である。断面は浅い皿状を呈する。遺物は出土していない。

SK03 (第232図)

SK03は長軸を南北にとる楕円形を呈し、長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.10mの焼壁穴である。底部には焼土層が薄く一面に広がる。遺物は出土していない。

SK04 (第232図)

SK04は長軸を東西にとる楕円形を呈し、長さ0.35m、幅0.27m、深さ0.18mの穴である。覆土にはわずかに炭化物が混じる。遺物は出土していない。

SK05 (第232図)

SK05は長軸を南北にとる楕円形を呈し、長さ1.0m、幅0.35m、深さ0.15mである。覆土には①④層に炭化物が混じる。遺物は出土していない。

SK06 (第232図・図版第41)

SK06は長軸を東西にとる楕円形を呈し、長さ0.28m、幅0.22m、深さ0.20mである。覆土にはわずかに炭化物が混じる。遺物は出土していない。

20 赤坂E遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂21-1外

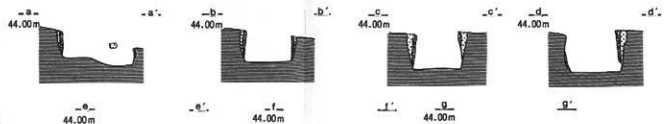
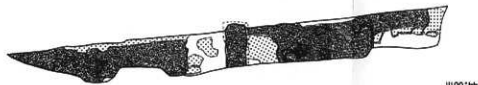
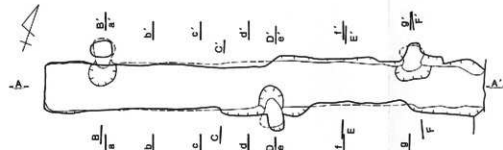
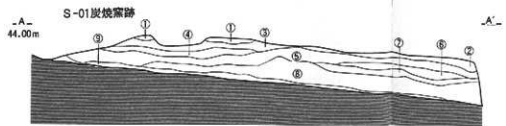
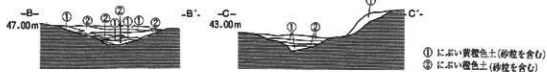
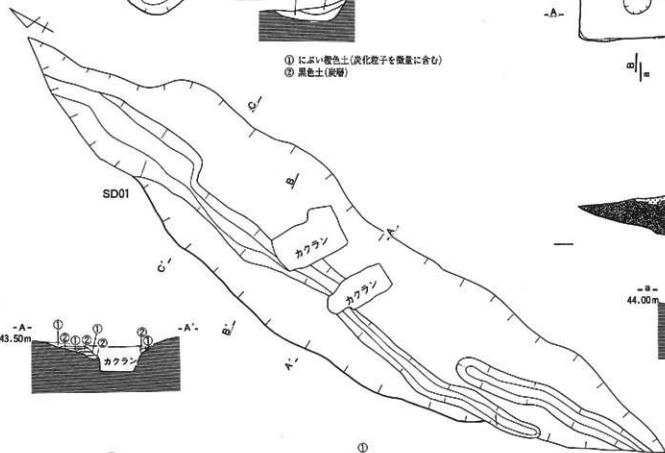
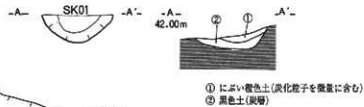
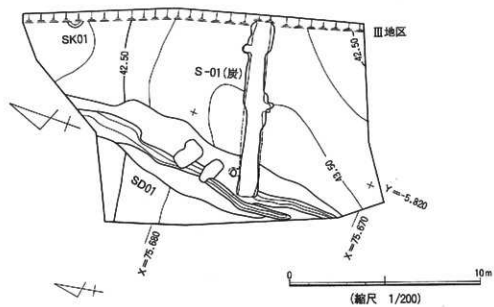
(1) 立地 (第43図)

赤坂E遺跡は、小柳谷上堤南端から谷尻までの間で発見されたⅠ～ⅩⅤ地区の総称である。遺構の確認できた地区はⅡ・Ⅴ地区の低地を除き丘陵の東斜面上に立地している。また小柳谷上堤から谷尻側に100mの位置で西側に小規模な谷が入り込み、さらに100m程の谷奥で南側に湾曲する地形となる。遺構(地区)はその谷の標高40～50mの斜面上に立地し、大半は西斜面に展開している。

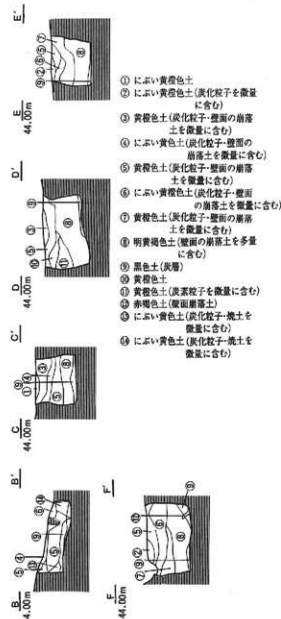
Ⅱ地区は低地から斜面側に移行する位置にあり、標高41.00～43.00m上に立地する。低地側は青井谷泥岩層を基盤とし、その上の暗灰褐色シルト層・灰褐色シルト層・白灰色砂質層を耕作土の基盤として一部に杭列が見られ、西斜面とその間には試掘溝で炭焼窯の焚き口前庭部の一部が削られている。試掘溝は暗灰褐色シルト層を遺構検出面としている。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯1で、周囲から表採遺物として、鉄滓・炉壁が整理箱で1箱の量が確認された。

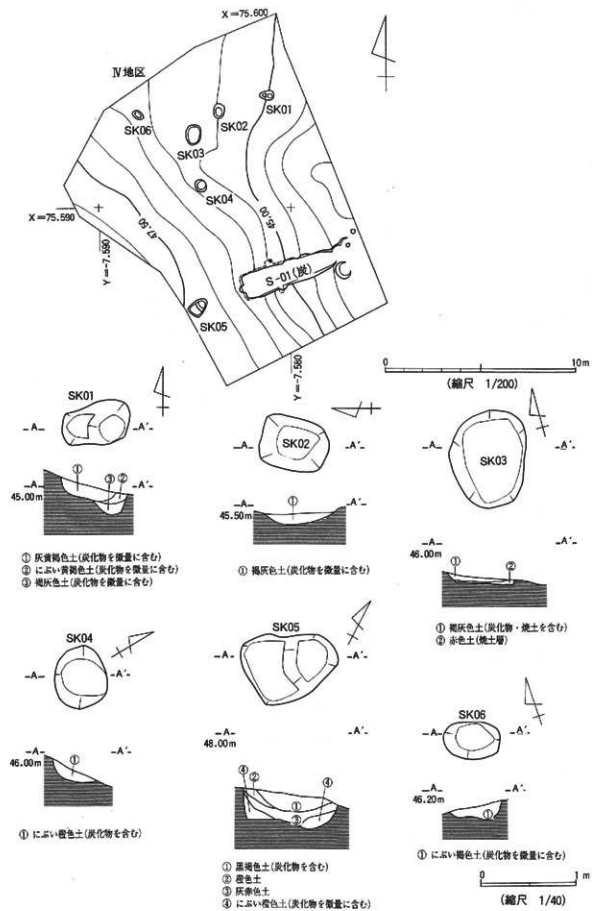


壁面
赤色
黒色

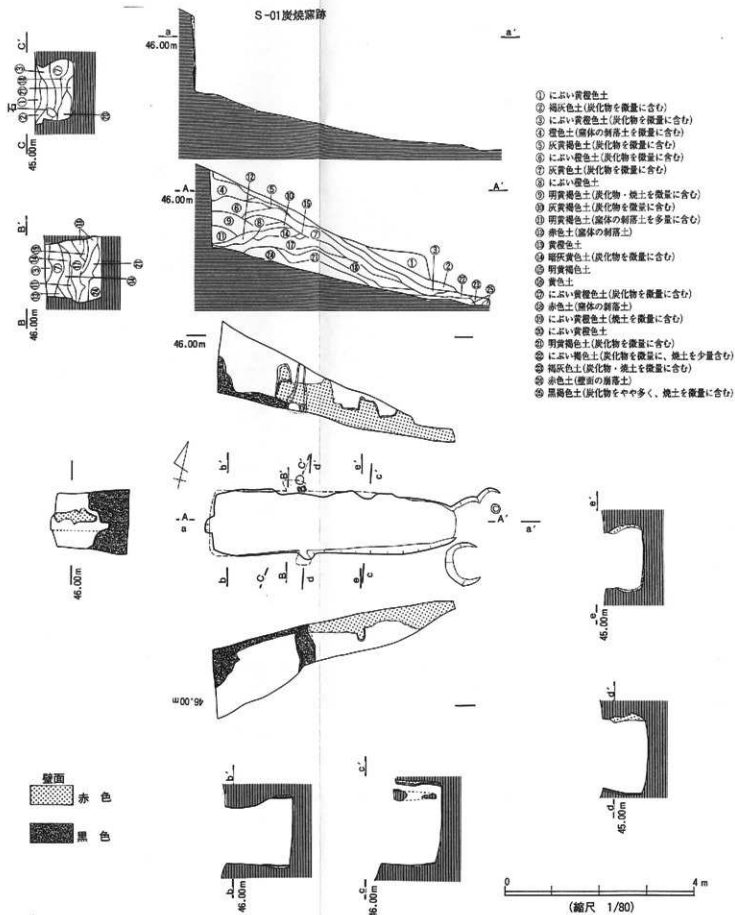


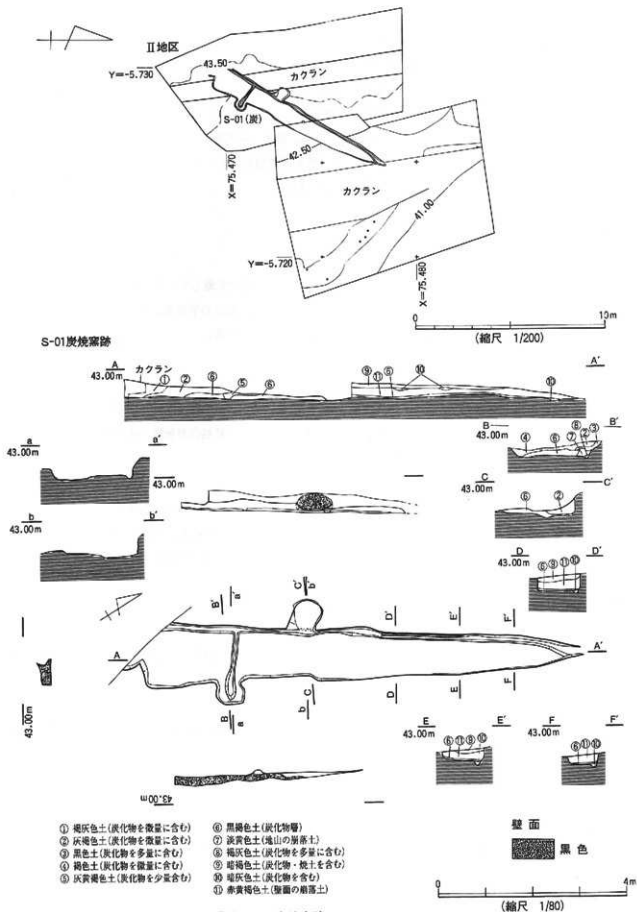
0 4m
(縮尺 1/80)

第231図 赤坂D遺跡III地区遺構配置図 SK01、SD01、S-01炭焼窯跡



第232図 赤坂D遺跡I/地区遺構配置図 SK01~06、S-01炭焼跡





第233図 赤坂E遺跡II地区遺構配置図 S-01炭焼窯跡

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第233図・図版第42)

S-01は東斜面に等高線に斜行するように構築されている。長さ11.6m以上、幅は奥壁12.0m、中央1.1m、焚き口0.4m、深さは奥壁0.20m、焚き口で0.18mのバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。窯体床面の排水溝は奥壁下から北壁沿いに焚き口まで続く。南側の煙出しから延びる排水溝は、床面を横切り北壁沿いの溝と直角につながる。床面の傾斜は焚き口から中央は2度で、焚き口は10度に変化する。煙出しは奥壁に1、両側壁に各1ずつ有し、窯体の床面より煙出し底面はやや低くなる。奥壁の煙出しは水道管敷設で切られている。壁面の色調は遺存している奥壁側・両壁の煙出し側が黒色化している。S-01から遺物の出土はない。

21 赤坂E遺跡V地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂50-3外

(1) 立地 (第43図)

V地区はII地区から約100m南に位置し、幅約30mの谷間に開けた水田に立地している。この谷間の西端には丘陵裾部沿いに小川が流れ、V地区はこの小川から約1m高い標高44.60～45.80mの平坦地にある。

(2) 遺構と遺物 遺構は穴2である。遺物は鉄滓・炉壁が整理箱に17箱である。

(3) 穴

SK01 (第234図・図版第42)

長さ1.35m、幅1.30m、深さ0.50mの掘り方は方形を呈し、遺構検出面には南北に2.0m、東西に1.4m、厚さ20cmの鉄滓が残る。最下層には厚さ10cmの①炭化物層が堆積するが、各層と壁は被熱痕が皆無の状態であり製鉄炉とは言えない。

SK02 (第234図・図版第42)

SK01の南側1mに位置し、遺構の南側端部は攪乱され全貌は明らかでない。長さ0.75m以上、幅0.8m、深さ0.2mの掘り方は方形で、断面形は袋状を呈する。検出面には5個の鉄滓が見られる。②層には厚さ10cmの炭化物層が堆積し、壁面・掘り方底部には赤色化した被熱痕が見られるが、還元化した部分はない。

22 赤坂E遺跡X地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂17-1外

(1) 立地 (第43・235図)

X地区は小柳谷上堤から谷尻側に100mの位置から、西側に入り込む幅20m前後の小規模な谷奥130mに位置し、標高60mの南斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯2であるが、設計変更により保存されている。炭焼窯は等高線に直交する1基と斜行する1基が確認されている。遺物は出土していない。

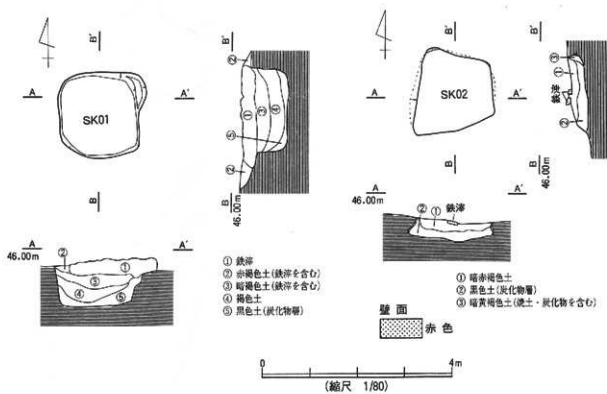
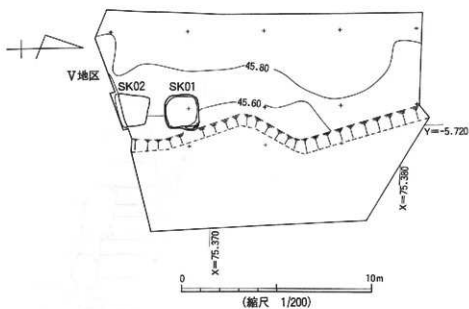
23 赤坂E遺跡XI地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂21-1外

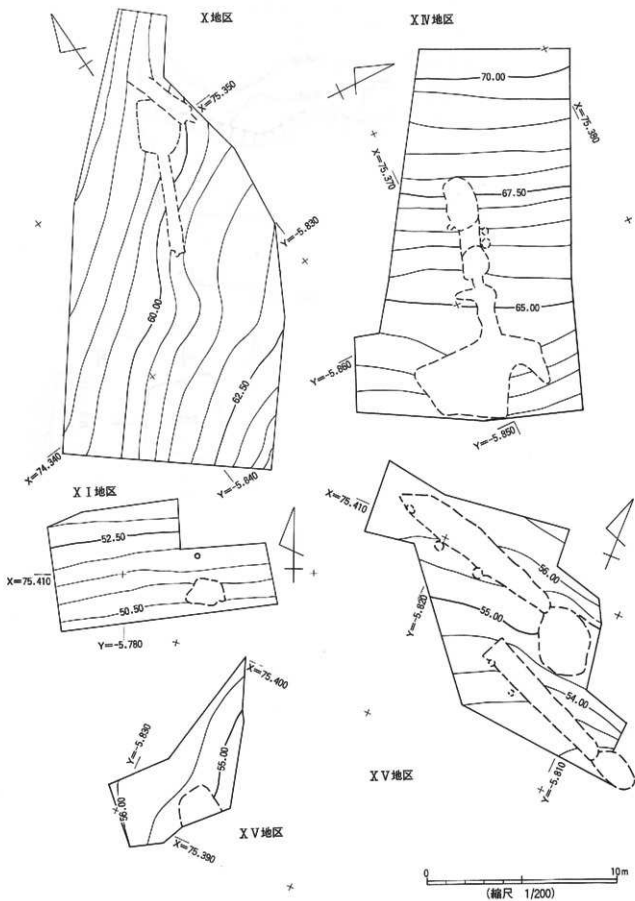
(1) 立地 (第43・235図)

XI地区はX地区の立地する谷筋の谷頭から50m入ったところに位置し、標高50mの南斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物 遺構は穴1で設計変更により保存されている。遺物は出土していない。



第234図 赤坂E遺跡V地区遺構配置図 SK01・02



第235图 赤坂E遺跡X・XI・XIV・XV地区遺構配置図

24 赤坂E遺跡XⅡ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂 外

(1) 立地 (第43図)

XⅡ地区は赤坂E遺跡の各地区が展開する丘陵谷間の谷頭から、約1km奥まった谷尻にあたるX75.120Y-5.790に位置する。小柳谷上堤から南側へ200m程の距離にあるXⅡ地区は、標高65-68mの丘陵裾部の西側緩斜面に立地し、この地区に面した谷間に開けた低地との比高差は1m程となっている。

(2) 遺構と遺物 遺構は炭焼窯1である。遺物は土師器細片が出土している。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第236図・図版第42)

S-01は緩斜面の等高線に対して直交するように構築されている。長さ4.2m、幅は奥壁1.3m、中央1.1m、焚き口0.9m、深さは奥壁1.72m、焚き口0.3mである。平面形はバチ状を呈する半地下式炭焼窯である。床面は奥壁と西壁の一部に排水溝が構築されている。断面b~b'は床面中央より西側が高く、東側の煙出しの底部が低くなる。床面の傾斜は奥壁から中央は10度、中央から焚き口は9度である。煙出しは奥壁に1、東側壁に1である。奥壁側の煙道は30cmの幅でオーバーハング気味に構築され、東側煙道は幅20cmで高さ1.2mにまで達する。壁面の色調は大半の壁が崩落しているが、西壁中央では床面から10-30cmが赤色化し、黒色化はわずかに奥壁と東側壁の煙出し部に見られる。前庭部は楕円形状となっている。

25 赤坂E遺跡XⅣ地区

・所在地 小杉町入会地字赤坂17-1外

(1) 立地 (第43・235図)

XⅣ地区は、小柳谷上堤から谷奥へ100m程の位置で西側に幅20m程の小さい谷が入り、その谷頭から130m奥まったところに位置し、標高64mの西斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯が1で設計変更により保存されている。炭焼窯は等高線に対して直交構築されている。

遺物は出土していない。

26 赤坂E遺跡XⅤ地区

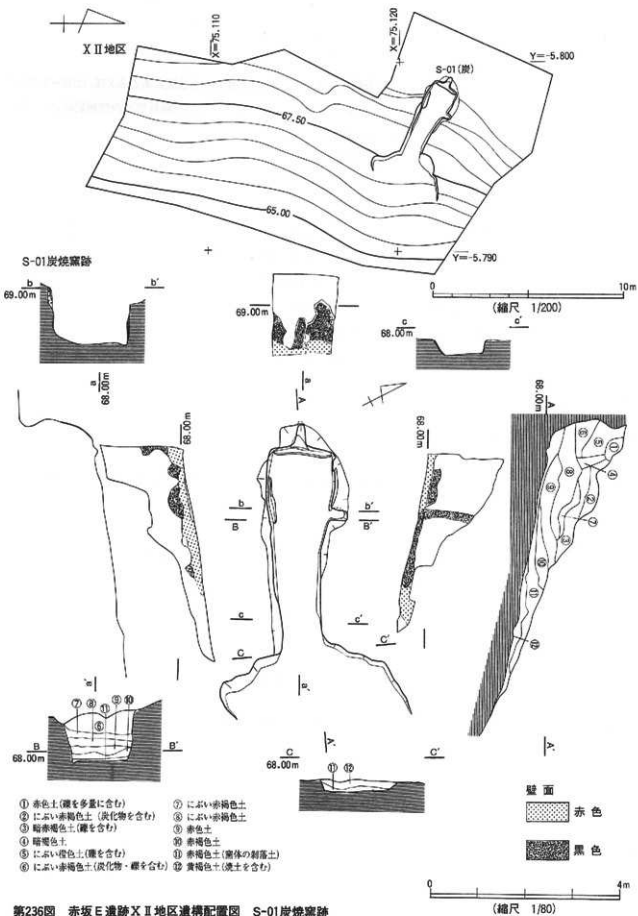
・所在地 小杉町入会地字赤坂21-1外

(1) 立地 (第43・235図)

XⅤ地区はXⅣ地区の北西側45mに位置し、標高55mの西斜面に立地する。

(2) 遺構と遺物

遺構は炭焼窯2、穴1であり、設計変更により保存されている。炭焼窯は等高線にほぼ平行して構築されている。遺物は須恵器片が出土しているが細片である。 (肥田・松田)



27 野田池A遺跡Ⅲ地区

・所在地 小杉町山本字野田12外

(1) 立地 (第237図)

野田池A遺跡は野田池の北西側に位置する。丘陵は谷津によって複雑に開折されており、遺跡はこの丘陵南斜面を中心に標高60～78mの範囲に展開している。Ⅲ地区は野田池の北西側にあって、標高58.5～62.5mの南方向に緩やかに傾斜する斜面の裾部分に立地している。

遺構は調査対象地域の南側、標高59mの等高線に沿って穴が2基連続して確認されている。

(2) 遺構と遺物

遺構は調査対象範囲内の北西側から穴が2基検出されている。遺物は踏査時に土師器の杯底部破片が1点見つかったが、本調査での遺物の出土はなかった。

(3) 穴

SK01 (第238図・図版第43)

SK01はX75.360Y-5.430区の南側に近接する。長軸を北西から南東方向にし、等高線に対し斜め方向の掘り込みになるものと想定される。谷側になる南側は流出しており構築当時の規模は不明である。遺存部分は長軸方向でおよそ3m、短軸方向でおよそ2m、遺構確認面からの掘り込みは北側の壁よりの最深部で0.46mを測る。床面はほぼ平坦でレベルは59.27mを測る。北及び西側に確認された壁は緩やかに立ち上がる。

覆土は5層に分層され自然堆積を示す。最上層の1層を除き炭化物が混入する。

SK02 (第238図・図版第43)

SK02はSK01の西側2mに近接する。平面形は南側の一辺がやや広くなる台形を呈するもので、長軸1.06m、短軸0.84m、確認面からの掘り込みの深さは最大で0.48mを測る。長軸は概ね南北方向を指向し、等高線に対しては僅かに東方向に振れる。壁はやや開き気味に立ち、床面はほぼ平坦でSK01とのレベルはSK02が20cm程低い。

覆土は最下層に黒褐色土が堆積するが、上層には褐色又は黄褐色土が自然堆積している。いずれの層にも多少ながら炭化物の混入が認められる。

28 野田池A遺跡Ⅳ地区

・所在地 小杉町山本字野田14外

(1) 立地 (第237・239図)

Ⅳ地区はⅢ地区の南側から西に伸びる谷津の更に西奥に位置するもので、標高68.5～70.5mの南東方向に向かい緩やかに傾斜する斜面に立地している。

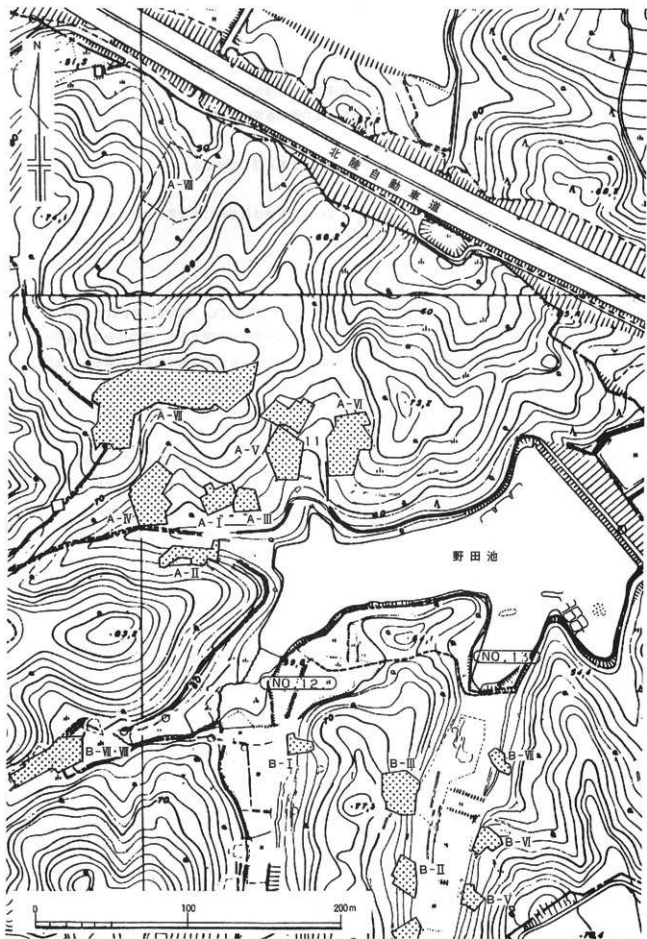
(2) 遺構と遺物

遺構は南斜面に製鉄炉3基、炭焼窯5基、穴2基がある。各遺構の分布は、斜面のやや急な標高65～70mの部分にS-01～03の炭焼窯跡、62.5～66mの範囲にS-01～03の製鉄炉とSK01・02、傾斜が緩やかになる59～62mの範囲にS-04・05の炭焼窯跡が検出されている。遺物は須恵器、土師器が数点と製鉄炉から鉄滓・炉壁が整理箱に8箱出土している。

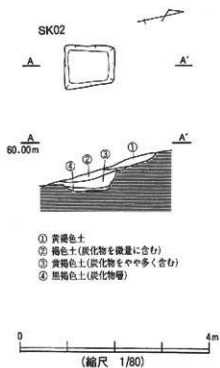
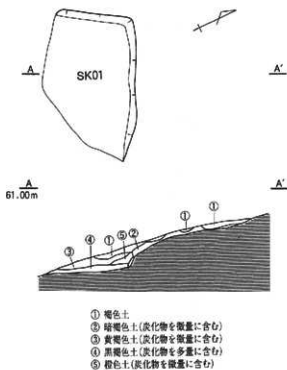
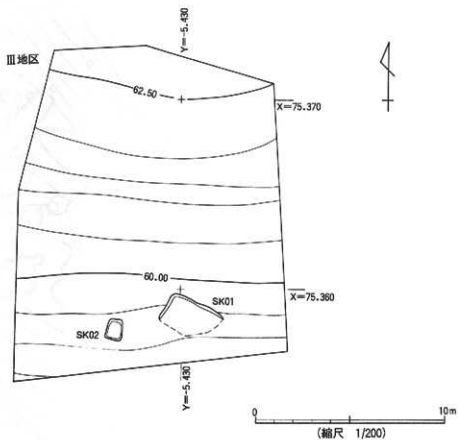
(3) 炭焼窯跡

S-01 (第241図・図版第44)

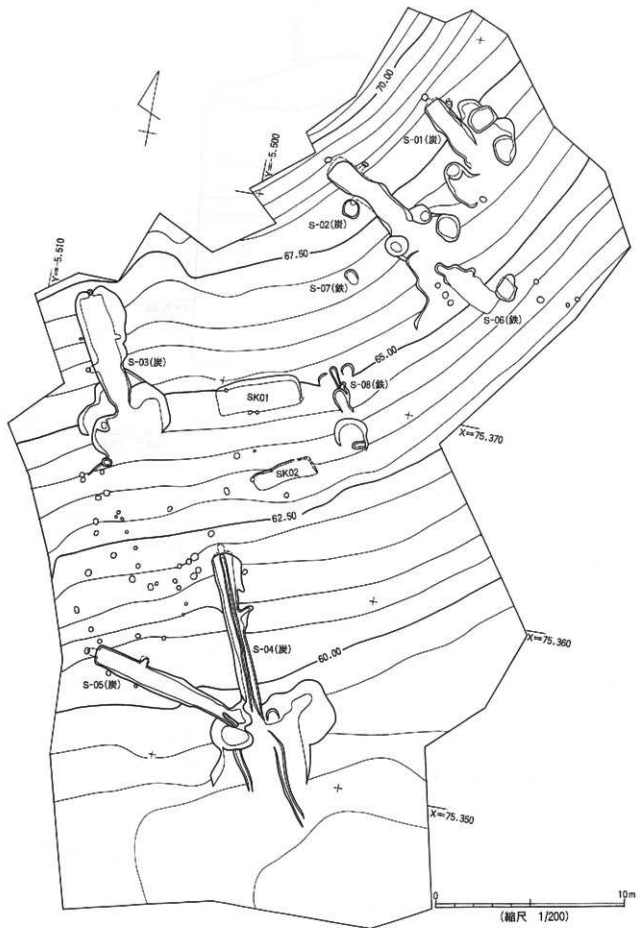
S-01は調査区域の北東端部のX75.380Y-5.490区に位置し、南東向き斜面の等高線に対し直交して築かれた半地下式の炭焼窯跡である。S-02炭焼窯跡と近接関係にあるが重複する遺構はない。焼成部の東側に3基、西側に2基探土穴が検出されている。



第237図 野田池A・B・C遺跡地形図 (1:2500)



第238図 野田池A遺跡Ⅲ地区遺構配置図 SK01・02



第239図 野田池A遺跡I/地区遺構配置図

竈体側壁の立ち上がりで確認できる全長は4.68mであるが、焚き口側が流出しているために不明瞭で、床面から判断して本来の全長は最大で8m前後と推測される。床面の幅は奥壁で0.8m、焼成部中程で0.87m、焚き口側で0.76mである。天井部は崩落し深さは不明であるが、遺構確認面からの掘り込みは確認できる最大部分で1.17mを測る。床面の傾斜は奥壁側よりでは21度でやや傾斜するが、焼成部分の中程では8度と水平に近く、焼成部中程から焚き口にかけては10度と僅かながら再び勾配を増している。また、床面はほぼ平坦で排水溝は確認されていない。

壁面は奥壁上部では赤色に熱変色し、下半以下は青灰色に還元されている。煙出し部分よりの東側の側壁上部は黒褐色に炭化している。その他の側壁は全面にわたり赤色に酸化している。工具痕等は確認されていない。

煙出しは奥壁中央と、東側壁の奥壁から0.7mの位置の2箇所に設けられている。奥壁側は床面に接して26×20cmの長方形に煙吸込み口が築かれ、煙道は円筒形に立ち上がり、開口部では35×29cmの長楕円形を呈する。東側壁側は床面より56cm上がった部分から上方に窓状の煙吸込み口が設けられる。煙道はほぼ円筒状で開口部で43×30cmの長楕円形を呈する。

竈体及び探土穴の覆土は9層に分層される。この内3・5・6層は竈体の剥落層である。

竈体床面における補修は確認されなかったが、側壁の一部には焼けた壁面が垂直に崩落している部分があり、貼壁が行なわれていた可能性がある。この補修作業に伴う粘土の採集跡が竈体の東西に位置する探土穴と考えられるが、竈体の両側に確認されている探土穴の内、東側の3基は階段状の掘り込みとなり、中央部分に位置する不整形の掘り込み内からは鉄滓がまとまって出土している。遺構の性格としてはやや疑問が残る。その他の掘り込みからの遺物の検出はない。土層からは竈体との新旧関係は捉えることができなかった。探土穴自体は時間差が確認でき、2回以上の探土が行なわれた可能性がある。竈体内からはその他の遺物は検出されていない。

S-02 (第241図・図版第44)

S-02は調査区域の北東寄りのX75.374~75.383Y-5.500--5.545区に位置し、南東向き斜面の等高線に対し直交よりもやや東方向に主軸を振る半地下式の炭焼窯跡である。焚き口の前庭部分に箱形の1号製鉄炉が重複するが新旧関係は不明である。

竈体の全長は5.15mである。床面の幅は奥壁で1.27m、焼成部中程で1.20m、焚き口側でおよそ1.0mである。天井部は崩落しており深さは不明であるが、遺構確認面からの掘り込みは確認できる最大部分で1.45mを測る。床面の傾斜は18度で焼成部はほぼ一定の傾斜を保つ。排水溝は確認されていない。

壁面は奥壁側で黒色に炭化しているが、スサ入りの粘土によって、中央の煙出しを掘削した部分に施された貼壁は灰色に変化している。奥壁上部では炭化した部分を取り囲むように赤色の酸化が認められる。また、両側壁煙出し部の貼壁は奥壁同様灰色の変化になっている。なお、西側壁の中央に見られる灰色に変化した部分は、壁の補修に伴う貼壁の可能性が考えられる。西側壁の上部は赤色に酸化している。工具痕等は確認されていない。

煙出しは奥壁中央と両側壁の3箇所に築かれている。奥壁側は横16cm、縦12cmの方形の煙吸込み口を床面に接して設け、煙道は直径46cmの円筒状に垂直に立ち上がり、開口部で竈体側に折れて直径26cm程度の不整形形となる。東側の煙出し部分は、奥壁から1.43mの位置に築かれ、床面に接して18×16cmの方形の煙吸込み口が開く。煙道は幅26cmで、開口部に向かって斜方向に立ち上がる。西側の煙出しは奥壁から2.24mの位置に構築され、やはり床面に接して下底18cm、上底10cm、高さ13cmの台形状の煙吸込み口が開く。煙道は幅40cmで斜方向に立ち上がり、開口部には不整形形の掘り込みが重複している。いずれも大きく穴を開けた後に貼壁を施すものである。

焚き口部分の施設については流出して明瞭ではないが、東側の壁端部付近に鉄滓が1点出土しており、同位置に見られる柱状の立石の代用と考えられる。

焚き口部分の両側には浅い円形の穴が対峙して掘られ、前庭部分の東側にも同様の掘り込みが施される。同穴底部

からは長径30cm弱の礎が1点出土しているが、焚き口部分に使用されていた石の可能性がある。

竈体内部の覆土は13層に分層され、4・7・9・11・13層に竈体の剝落土が混入している。また、4層には炭化物が混入している。土器や土製品の出土はなかった。

S-03 (第240図・図版第44)

S-03は調査区域の西の端部X75.380~75.370Y-5.510区に位置し、南南東向き斜面の等高線に対しほぼ直交方向に主軸を有する半地下式の炭焼竈跡である。重複遺構はない。

竈体の全長は6.04mである。床面の幅は奥壁で1.17m、焼成部中程では1.42mと胴張りになる。焚き口側ではおよそ0.58mで緩やかにすぼまる。天井部は崩落しており深さは不明であるが、遺構確認面からの掘り込みは最深部分で1.67mを測る。床面の傾斜は奥壁側で10度、燃焼部中程で一部20度程の急勾配になった後、焚き口部に向かって12度程の傾斜で一定する。排水溝は確認されていない。

壁面は奥壁側及び東西の壁の焚き口側で黒色に炭化している。奥壁中央部分の煙出し部分には一部赤色の酸化が見られる。工具痕等は確認されていない。

煙出しは奥壁中央と、西側壁2箇所、東側壁1箇所の合計4箇所に構築されている。奥壁側は横16cm、縦18cmの不整形円形の煙吸込み口を床面に接して設け、煙道は直径35cmの円筒状にほぼ垂直に立ち上がる。開口部は直径27cm程度の不整形円形となる。東側の煙出し部分は、奥壁から2.43mの位置に床面から直径36cm前後の円筒状に築かれている。西側の煙出しは2基確認されている。1基は奥壁から2.55mの位置に、床面から10cm程高い位置から掘り込まれる。下位では直径20cm程を測るが先端部分では13cm前後と細くなる。形態は緩やかなクランク状に中程で折れ曲がっている。もう1基は奥壁側から3.72mの位置に設置されている。やはり床面より20cm程高い位置から築かれ、円筒状にほぼ垂直に立ち、幅も先端部に向かい細くなる。

焚き口部分の東側には30×27cm、厚さ10cm前後の板状鉄滓の塊が立てかけられている。西側には検出されていない。焚き口の前面には前庭部が掘り込まれている。竈体の焚き口寄り部分を要に扇形に広がるテラス状の1段目と、焚き口部に3.38×1.58mの長方形に掘り込まれる部分の2段構成になっている。床面のレベルはテラス部で64.80m、前庭中央部分で64.04mを測る。また、前庭部の西側壁よりには、方形で15cm程の浅い掘り込みの穴が付随している。竈体内部の覆土は10層に分層され、4・6・7・8層に竈体の剝落土が混入している。また、6・8・9層には炭化物が混入している。土器や土製品の出土はなかった。

S-04 (第242図・図版第44)

S-04は調査区域南西側のX75.370~75.350Y-5.500区に位置し、南向き斜面の等高線に対しほぼ直交して掘られた半地下式の炭焼竈跡である。S-05炭焼竈跡と前庭部で重複する。新旧関係は前庭部の覆土の堆積状況より本炭焼竈跡が古いことが判明している。

竈体の全長は9.02mである。床面の幅は奥壁で0.96m、焼成部中程では0.70m、焚き口側ではおよそ0.50mで緩やかにすぼまる。天井部は崩落しており深さは不明であるが、遺構確認面からの掘り込みは確認できる最深部で1.50mを測る。床面の傾斜は、奥壁側で7度、燃焼部中程では5度未満とほぼ平坦になる。焚き口側では13度と若干ながら勾配を増す。等高線に対して直角に近い方向で構築されているが、地形の傾斜を有効に利用しているとは言えない。床面の勾配が緩やかな為に傾斜を利用した排水が不可能と考えられるが、これを補填するかのように奥壁の煙出し部直前から焚き口部に至るまでの床面中央部に、幅12~25cm、深さ5~12cmの排水溝が掘られている。

壁面は奥壁側は黒色に炭化している。側壁は西側では上半が灰色、下半で黒色と酸化の状況に差がある。東側壁は奥壁側部分で確認できているが上下の酸化の状況には明瞭な差は認められない。西側壁の中程から奥壁寄りに工具痕が確認されている。

煙出しは奥壁中央と、東側壁の中間からやや奥壁側の位置に1箇所確認されている。奥壁寄りに壁の崩壊が見られるがこの部分には煙出しは確認できなかった。奥壁側は直径27cmの半円形の煙吸込み口を床面に接して設け、煙道は最大で直径30cm、最小で16cmと逆漏斗状に掘られ、ほぼ垂直に立ち上がる。開口部は流出しており確認できない。東側の煙出し部分は、奥壁から3.42mの位置に構築されるもので、側壁の落下によって煙吸込み口の位置及び大きさは確認できていないが、煙出し底部の掘り込みは床面よりも3cm程深く掘り込まれている。煙道の立ち上がりは僅かながらクランク状の屈曲が見られ、更に開口部分は竈体より70cm余り外側に離れた位置に掘り出される。

焚き口部分の西側には径が18cm程の竈が設置されている。東側には検出されていない。

焚き口の前面には前底部が掘り込まれている。掘り込みは竈体の基軸をほぼ対称にして隅丸長方形に掘られており、本炭焼窯の前底部としての掘り方と考えられるが、本炭焼窯が機能を停止した段階で新たに構築されたS-05炭焼窯では、前底部の掘り広げは行なわれなかった可能性が高い。なお、焚き口部分で一端途切れる排水溝は、緩やかに屈曲した後、前底部の南側へ最大29cmとやや幅を広げて5m程続く。この排水溝は見えたS-05炭焼窯の主軸方向と一致しているが、S-05炭焼窯跡とはレベル差が明瞭で本炭焼窯跡に伴うものである。また、前底部の左側に掘り込まれる不整形の穴からも排水溝が掘り込まれているが、レベル的には本炭焼窯跡に伴うものと考えられる。

竈体内の覆土は12層に分層される。この内3・7・8層はS-05炭焼窯跡の覆土である。同層の下部がS-05炭焼窯の底面のレベルとほぼ一致する。1・9・10層に竈体の剥落土が混入している。また、1・2・4・10・11・12層には炭化物が混入している。この内、11層は焚き口部分から排出された炭化物である。遺物の出土はなかった。

S-05 (第242図・図版第44)

S-05は調査区域南西側のX75.360Y-5.510～5.500区に位置し、南向き斜面の等高線に平行に近い方向に主軸を傾ける半地下式の炭焼窯跡である。S-04炭焼窯跡と前底部で重複する。新旧関係は前底部の覆土の堆積状況からS-05炭焼窯跡が新しいことが判明している。

竈体の全長は7.85mである。床面の幅は奥壁で0.95m、焼成部中程では0.75m、焚き口側では0.62mで僅かずつではあるが先端に向かって直線的にすぼまる。天井部は崩落しており深さは不明であるが、遺構確認面からの掘り込みは最深部で1.29mを測る。

床面の傾斜は奥壁側から焚き口部分にかけて3度前後とほとんど平坦である。床面の勾配が緩やかな為に傾斜を利用した排水が不可能と考えられるが、これを補填するかのように奥壁の煙出し部直前から焚き口に至るまでの北側壁の直下に、幅10～12cm、深さ10cm程の排水溝が掘られている。更に、竈体内にたまる水を効率的に排水する為に、床面は北側壁側に最大で7度の傾斜をもっている。

壁面は奥壁側は黒色に炭化している。側壁は北側では燃焼部の中程まで黒色に炭化しているが、焚き口部よりには赤色の酸化が観察される。南側壁は中程から奥壁側にかけて大きく崩落しており、概ね焚き口部分まで黒色に炭化しているが、焚き口側の確認面に近い上方は赤色の酸化が部分的に認められる。工具痕は確認されていない。

煙出しは奥壁中央と、北側壁の中間からやや奥壁側の位置に1箇所、南側壁の奥壁より2箇所の合計4箇所が確認されている。奥壁側は煙吸込み口を床面に接して設けているが、形状は崩落の為に明瞭ではない。煙道は直径25cmの円筒形に立ち上がり、底部から55cmの位置で北方向にL字形に折れて立ち上がる。開口部分は34×27cmの楕円形となる。北側の煙出しは、奥壁から2.6mの位置に構築されるもので、側壁の落下によって煙吸込み口の位置及び大きさは確認できていないが、煙出し底部の掘り込みは床面よりも3cm程深く掘り込まれている。煙道は方形に掘り込まれほぼ垂直に立ち上がる。開口部は竈体に接するように位置し、煙道の掘り込みよりもやや小さな方形を呈する。南側壁煙出しは奥壁から1.0mに1基と2.57mの位置に1基が確認されている。いずれも壁の崩壊によって明瞭ではない。奥壁側は細い掘り込みがやや焚き口方向に傾斜して構築されている。また煙道の最下部は床面から36cm上方の位

置で止まっている。燃焼部中央よりの煙道は直径18cm前後の円筒形に築かれ、奥壁側に傾斜している。また、煙道の最下部は床面から24cm上方の位置で止まっている。

焚き口部分の南側には18×15cm、厚さ12cmの礎が設置してある。本来壁際に立てかけてあったものが窠体側に倒れたものと考えられる。北側には検出されていない。

焚き口の前面には前底部が掘りこまれている。掘り込みはS-04の窠体の基軸を対称として隅丸長方形に掘られており、同炭焼窠跡の前底部と考えられるが、S-04が機能を停止した後に新たにS-05炭焼窠が築かれたもので、S-04の前底部を32cm程埋め戻して構築しており、本炭焼窠構築段階では前底部の掘り上げは行なわれなかった可能性が高い。なお、焚き口部分で一端途切れる排水溝は、前底部では確認できていない。

窠体内の覆土は10層に分層される。この内4・9層はS-04炭焼窠跡の覆土である。同層の下部がS-04炭焼窠前底部底面のレベルにはほぼ一致する。5・10層は窠体の剥落土及び炭化物を混入している。遺物の出土はなかった。

(4) 製鉄炉

S-06 (第243図)

S-06は壺型製鉄炉である。丘陵南東斜面のX75.380Y-5.490区に位置し、標高は64.5~66mである。S-02炭焼窠の前底部部分から南東の斜面側に検出されたもので、新旧関係は不明である。製鉄炉は南東方向に傾斜する斜面に築かれる。フイゴ座は検出できなかった。炉体は東西40cm、南北50cmの大きさで楕円形をなし、下方で開口する。続く排滓溝は、長さ3.0m、幅1.1~1.35mの規模である。北東側端部の中央及び北側のコーナー付近に円形の掘り込みが、また、東側コーナー部分には不整形の穴状の掘り込みがそれぞれ確認されているが、性格並びに本遺構との新旧関係についても確認できなかった。

覆土は橙色を呈し少量の炭化物が混入する。確認できる土層は1層のみであった。

下部遺構である排滓溝の勾配は、19°と強く、下端でゆるくなる。

鉄滓や炉壁などの遺物は、遺構からは出土していない。調査区域内からは整理箱に8箱の鉄滓が出土している。

S-07 (第243図・図版第43)

S-07の壺型製鉄炉は、丘陵南東斜面のX75.380Y-5.500区に位置し、標高は66.50~67mである。重複遺構はない。フイゴ座・排滓溝は削平を受けたか流出したものと考えられ、図示できる程の状態ではなかったが炉体の南側には僅かながら排滓溝の痕跡が確認できる。確認できる現状での炉体は長軸をN-42°-Wに示し、平面形は0.88×0.57mの隅丸長方形を呈する。壁は北側のみ立ち上がりが確認され、最深で23cmを測る。炉体の開口部は南側に位置するものと考えられる。床面は南東側に向かっておよそ10度の傾斜がある。壁及び床面は、被熱により全体に青灰色に還元し、また一部にはガラス化している部分も見られる。更に、壁の外周は赤色に酸化した部分が20~30cm程の厚さで取り巻いている。覆土は橙色の土が充填されていたが鉄滓は含まれない。遺物は出土しなかった。

S-08 (第243図・図版第43)

S-08の壺型製鉄炉は、南東側斜面のX75.380~75.370Y-5.500区に位置し、標高は63.50~65.5mである。階段状に掘り込みが連続して検出されており、それぞれ上段よりフイゴ座跡とその中心のフイゴの軸及び送風管の設置されていた溝、炉体、排滓溝、排滓場と考えられる。

フイゴ座跡は左右両方ともに50cm四方の隅丸方形を呈し、中央の炉体に延びる溝を軸に対称になる。フイゴ座跡の横断面を観察すると、床面は左右両端に向かっておよそ15度で傾斜し、溝の立ち上がり部分が最も高くなるように構築されている。溝幅は最大25cmで掘り込みの深さは7cm前後を測る。溝の底部はおよそ5度の角度で炉体に向かって傾斜し、炉体壁上面に刻まれるV字の切り込み部分でこれに接続している。溝内部からは軸部の痕跡は確認されていない。

炉体は1.18×0.83mの長楕円形を呈し、掘り込みは最深で0.37mを測り南東側に開口する。開口部の幅は約30cmと

狭くなって排滓溝へと続く。底部及び壁の大半から排滓溝にかけては青灰色に還元し、壁の一部にはガラス化した部分もあり、凹凸が激しい。また、これを取り囲む外周は被熱による酸化で赤色に変色している。炉体内に充填される覆土は、2層に分層され上層には鉄滓・炉壁を含むしりのない灰色の土が、下層には炭化物の層が確認されている。炭化物は換業時の燃料としての炭、若しくは換業後の混入が想定され、炉内の除湿にかかわるものではない。

排滓溝は炉の開口部を要に扇形に広がり排滓場へと接続される。確認時点ですでに流出しており溝状に掘り込まれていたか否かの確認はできなかったが、排滓場へと続く部分が最大幅63cmにわたって青灰色に還元されていることより確認できる。

排滓場は直径1.72mの円形で穴状の掘り込みを呈する。確認面下の掘り込みは最深で0.57mを測る。北側の壁中央部分には27cmの幅で青灰色に還元された部分が確認され、排滓が壁をつたって流れ下ったものと考えられる。排滓場の南東側には浅い溝状の掘り込みが、幅28cm、深さ14cm、長さ65cmにわたり、穴の出口をふさぐように掘り込まれているが性格は不明である。本排滓場内の充填土は4層に分層され、上層には鉄滓及び炉壁を含む柔らかな土が覆い、下層には炉体同様に炭化物の層が確認されている。

遺物は土師器杯1点が排滓場から出土している。その他に同所から出土した土師器の細片及び鉄滓が少量ある。

(5) 穴

SK01 (第243図・図版第43)

SK01は丘陵南東斜面のX75.380~75.370Y-5.500区に位置し、標高65.00mに構築され重複する遺構はないが、西側及び南側は流出しており本来の形状は不明。北東側のコーナー部分のみ確認されている。現存する規模は東西方向4.42m、南北方向1.77mである。遺構確認面からの掘り込みは北側壁直下で0.34mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は南側に向かって緩やかに傾斜している。西側壁際に1基及び中央南側部分に2基小ピットが検出されている。いずれも直径が12cm、深さ25~30cmで先端に向かって細くなる枕状の形状である。

覆土は3層に分層され自然堆積である。

SK02 (第243図・図版第43)

SK02は丘陵南東斜面のX75.370Y-5.500区に位置し、標高は63.50mである。SK01の南側に主軸をほぼ同じく構築されているもので、相互に関連する遺構と考えられる。また同様に重複する遺構はないが、西側及び南側は流出しており本来の形状は不明である。北東側のコーナー部分のみが確認されている。現存する規模は東西方向3.21m、南北方向0.93mである。遺構確認面からの掘り込みは北側壁直下で0.10mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は南側に向かって緩やかに傾斜している。南壁の西よりに2基の小ピットが検出されている。中央よりの1基は直径が10cm、深さ6cmで先端に向かって細くなる浅い凹みである。西側の1基は25×20cm、深さ46cmの柱穴状である。覆土は2層に分けられるが、ほぼ青黒色の単層で床面付近に明褐色土がブロック状に含まれる。

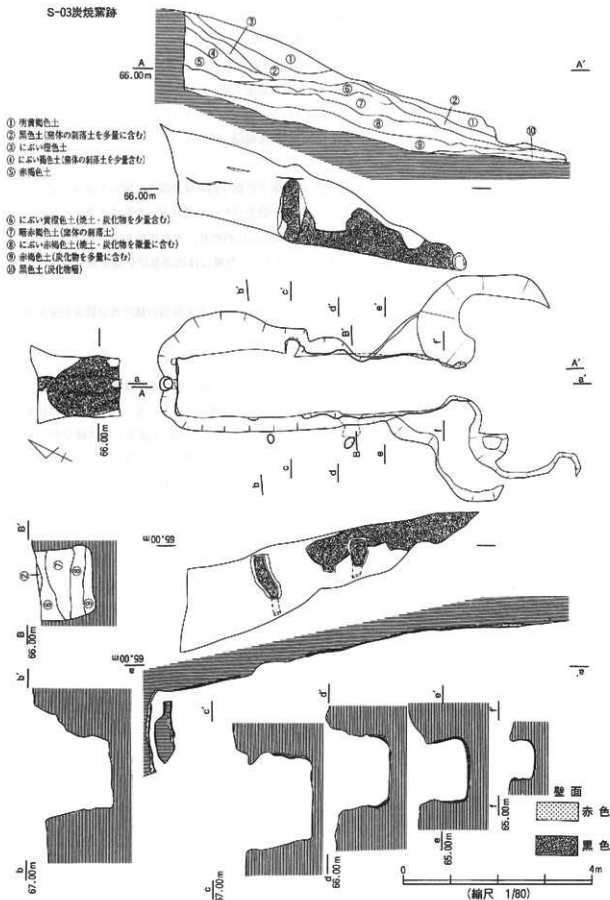
(6) 柱穴群 (第239図)

丘陵南東斜面のX75.380Y-5.490区のS-06製鉄炉周辺並びに、丘陵南斜面のX75.360~75.370Y-5.500--5.510区で、S-03炭焼窯跡とS-04・05炭焼窯跡の中間に集中する2群が確認されている。平面形は円形及び隅丸の長方形が見られ、規模は直径19~49cm、深さ20~36cmとさまざまである。柱痕が確認できたものはなく、建物の柱穴として配置が想定できたものもない。

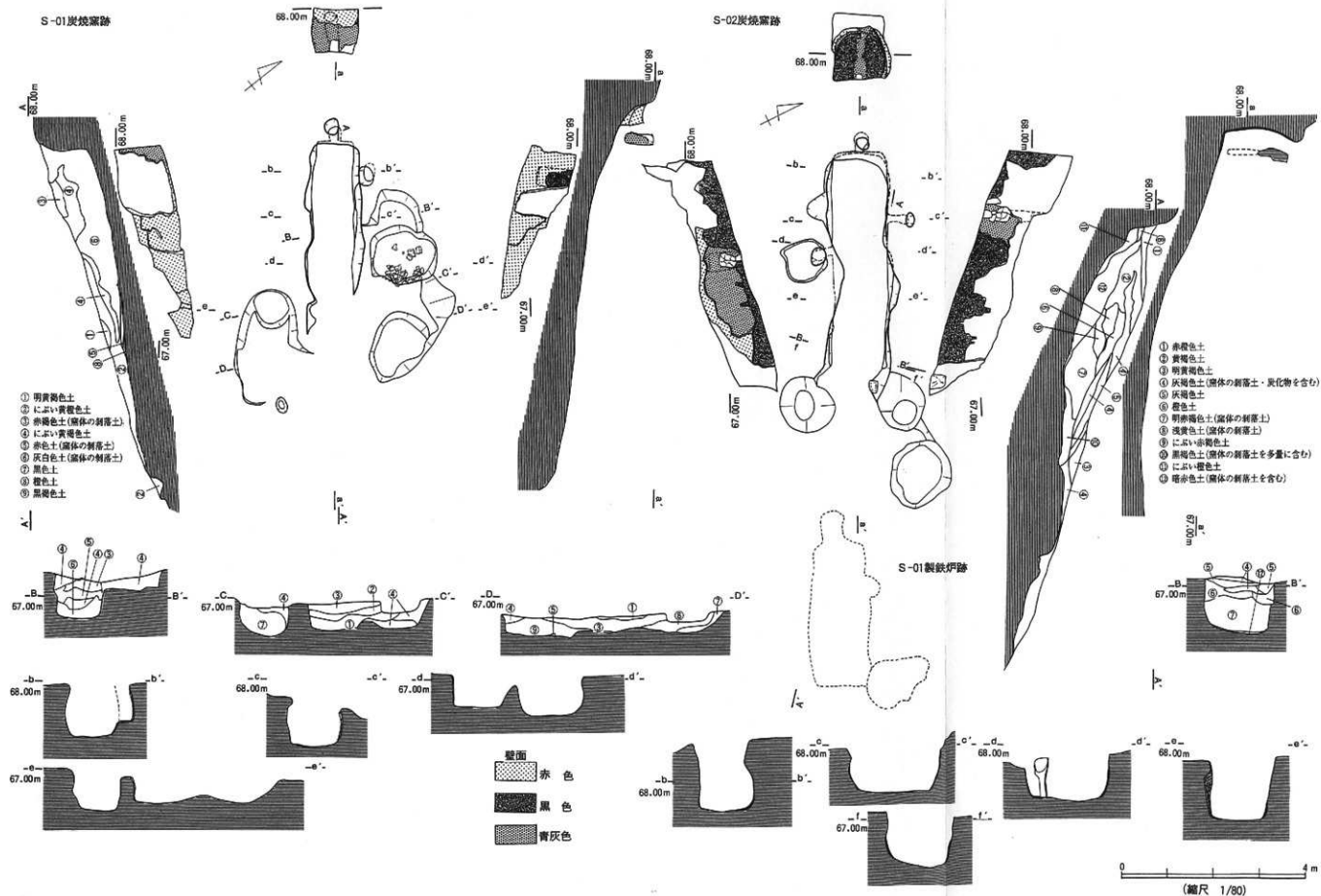
(7) 出土遺物 (第255図1・図版第98の1)

1は土師器杯でS-08より出土している。底部は回転糸切り無調整である。

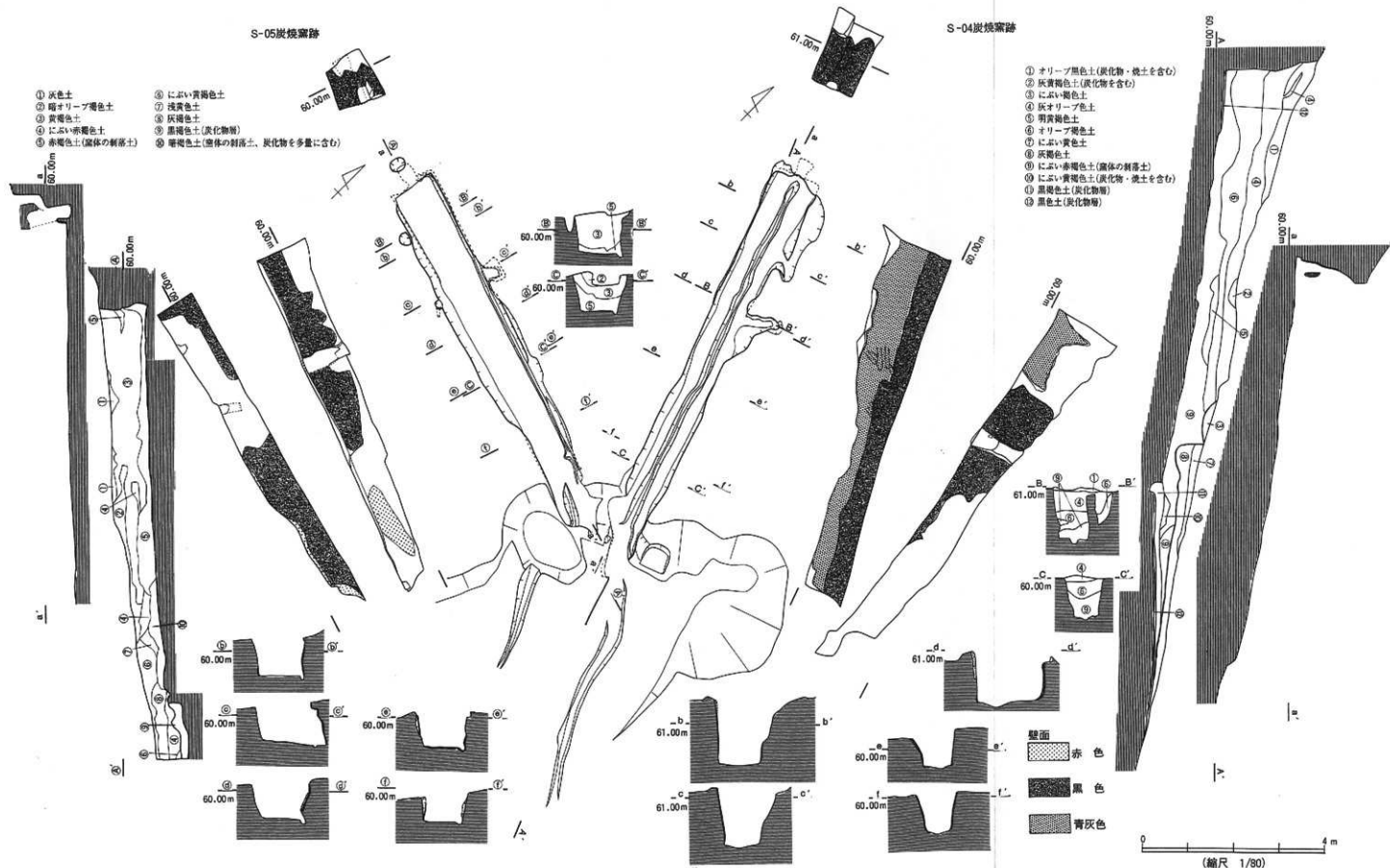
S-03炭焼窟跡



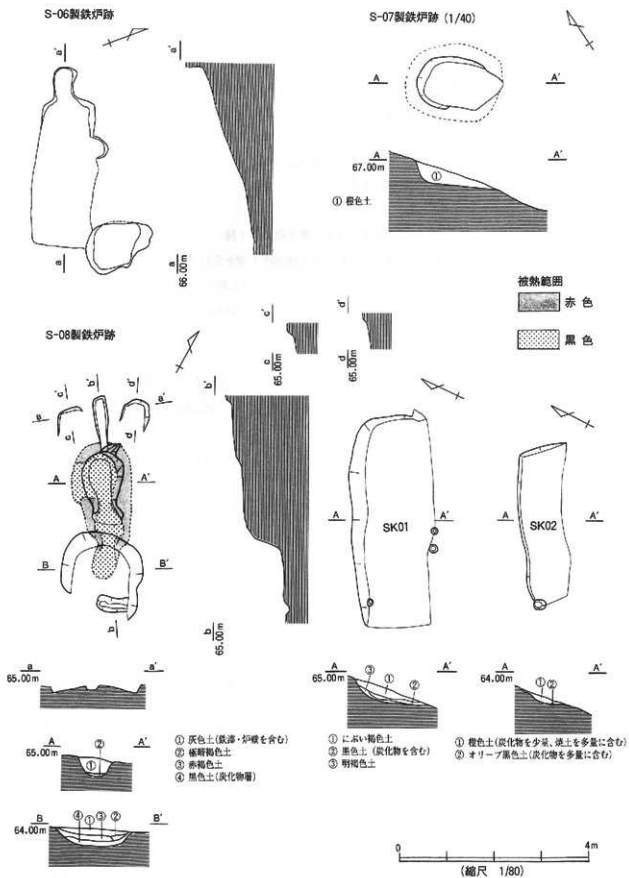
第240図 野田池A遺跡V地区 S-03炭焼窟跡



第241図 野田池A遺跡Ⅳ地区 S-01・02炭焼窯跡



第242図 野田池A遺跡IV地区 S-04・05炭焼窯跡



第243図 野田池A遺跡I/地区 S-06~08製鉄炉跡、SK01・02

29 野田池A遺跡V地区

・所在地 小杉町山本字野田12外

(1) 立地 (第237・244図)

V地区は野田池の北西側にある丘陵(標高78.2m)頂部からやや南東側へ下った南東から東向きの斜面部に位置する。調査区域は南北の2箇所に分かれ、北側調査区域はL字形に折れる範囲で標高は58.0-67.5mであり、61m付近で僅かながら傾斜は緩やかになる。遺構は西側急斜面部分に炭焼窯、製鉄炉が検出され、傾斜が緩やかになる部分に掘立柱建物、穴、遺物包含層が検出されている。南側調査区域は南北に広い範囲で、やはり61mラインで傾斜は緩やかになる。遺構はこの傾斜の変換点付近に集中する。

(2) 遺構と遺物

北側調査区域からは炭焼窯跡1基、堅型製鉄炉跡1基、掘立柱建物跡1棟、穴3基、ピット群を含む遺物包含層1箇所が検出されている。南側調査区域では、住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟を含むピット群1箇所、溝3条、穴4基が検出されている。なお、穴は現地調査でSK42まで番号を付したが、7基を除いて遺構と判断されず欠番とした。遺物は住居跡・穴・溝、遺物包含層から須恵器・土師器・磁石等が出土している。

(3) 炭焼窯跡

S-01 (第245図・図版第46)

S-01は北側調査区域南西側のX75.420Y-5.453-5.420区に位置し、東向き斜面の等高線に対しほぼ直交する方向に掘られた地下式の炭焼窯跡と想定される。SK01と前庭部で重複する。新旧関係は前庭部の覆土の堆積状況からほぼ同時期、若しくは前庭部の一部でS-01関連遺構と考えられる。

窯体の全長は4.91mである。床面の幅は奥壁で0.99m、焼成部中程では0.87m、焚き口側ではおよそ0.75mで先端に向かって僅かにすぼまる。天井部は概ね崩落しており深さは不明であるが、Bセクションでは2層に赤褐色の地山層の酸化部分、さらに続く4層では内壁の崩落層が確認されている。堆積状況から判断して炭焼窯跡の天井部であった可能性が高い。同セクションで観察される天井の高さは、床面から1.08mである。断面の形状は底部が平坦で、天井はドーム型を呈していたものと判断される。焚き口側は地山の傾斜角度から想定しても、天井部が人為的に構築されていた可能性が高い。したがって、燃焼部の中程から奥壁側にかけて地下式になっていた可能性がある。

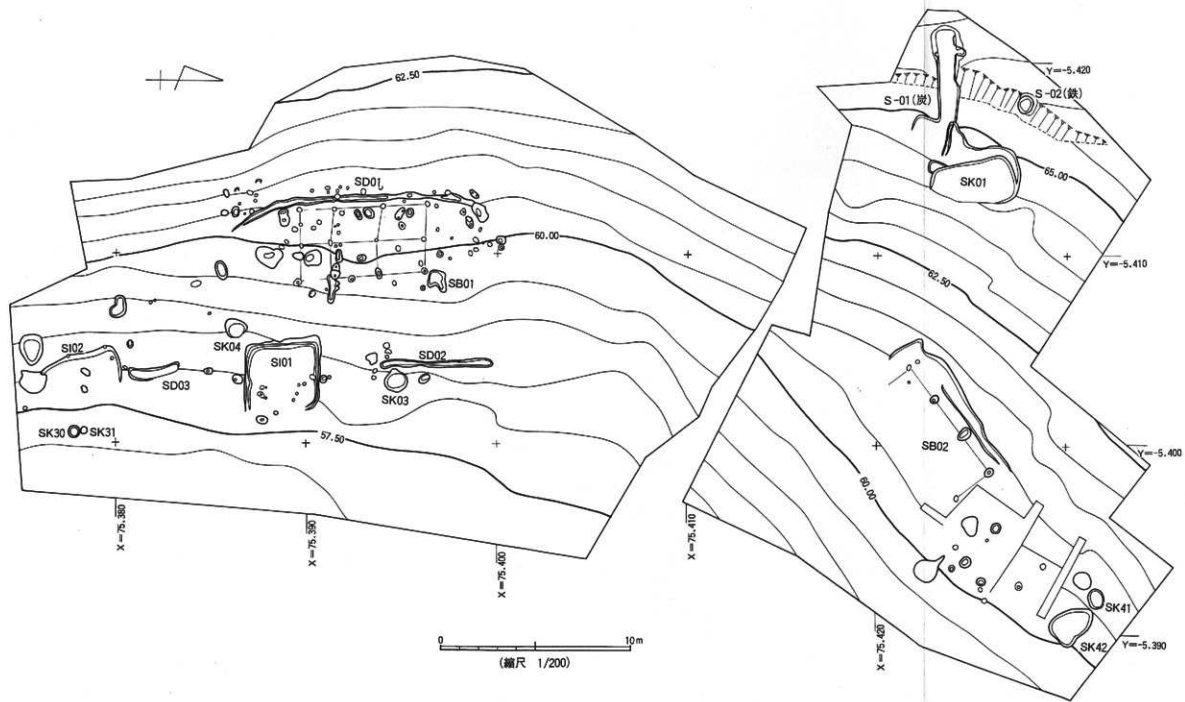
床面の傾斜は、奥壁側から燃焼部中程までは18度とほぼ一定で、焚き口側では10度未満と若干ながら勾配が緩やかになる。斜面の等高線にほぼ直交する方向で構築され、地形の傾斜を有効に利用している。窯体内部には排水溝は築かれていない。

壁面は奥壁面が剥落していて確認できない。側壁も奥壁側はやはり剥落しているが、両側ともに上半は灰色、下半は黒色に炭化している。焚き口部分は赤色に酸化した部分が帯状に広がっている。工具痕は確認されていない。

煙出しは奥壁中央には確認されていない。壁の崩落により崩れ落ちてしまった可能性もあるが、床面の範囲から判断して奥壁側には設置されていなかった可能性が高い。北側壁には奥壁から1.18mの位置に1基設けられている。煙出しはこの1基のみである。煙道は窯体側が崩落している為に不明瞭であるが、47×37cm前後の丸みを帯びた三角柱形に掘り込まれ、内面は黒色に炭化している。煙吸込み口の底は床面のレベルと一致している。吸込み口の形状は不明であるが、入口部分に隙が2個対峙して埋め込まれており、おそらくこの部分の吸込み口の内壁になるものと考えられる。開口部は2分の1が流出している。焚き口部分には閉塞に用いる礎等は確認されていない。

焚き口の前面には前庭部が大きく広がる。規模や形状はSK01と重複していて不明である。前庭部の中央には燃焼部の北壁端部を起点に幅10-15cm、深さ5cm程の排水溝が1.85m掘り込まれている。

窯体内の覆土は7層に分層される。5層は窯体の剥落土が混入し、7層は黒褐色の炭化物層となっている。出土遺



第244図 野田池A遺跡V地区遺構配置図

物はない。

(4) 製鉄炉跡

S-02 (第246図・図版第46)

S-02は型製鉄炉である。北側調査区域丘陵東斜面のX75.420-75.430Y-5.420区に位置し、標高は66.00mである。階段状に削平された斜面の肩部に立地するもので、炉体のみ検出されている。

炉体は0.89×0.75mの長楕円形を呈し、掘り込みは最大で0.24mを測り東又は南東側に開口する。開口部の幅は不明である。底部は南側に向かって22度の角度で傾斜している。底部及び壁の大半と左壁の一部は青灰色に還元し、奥壁側から外周部にかけては、最大25cm幅で被熱による赤色の還元が認められる。

炉体内に充填される覆土は、4層に分層され上層には炉壁を含み、下層は炭化物を多量に混入する暗褐色土が混入している。炭化物は操業時の燃料としての炭、若しくは操業後の混入が想定され、炉内の除湿にかかわるものではない。フイゴ座、排滓溝等の施設は流出したものであろうか、いずれも確認されていない。

遺物は焼けた壁以外に出土しなかった。

(5) 住居跡

SI01 (第246図・図版第45)

SI01は南側調査区域丘陵東斜面のX75.380-75.390Y-5.410区に位置し、東に向かう斜面がやや傾斜を緩める部分に構築されている。平面形はほぼ方形で、その規模は現存部で南北3.90m、東西およそ3.07m、長軸方向はほぼ南北方向を指し示す。遺構確認面下の掘り込みは最大で0.44mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は西側壁際では平坦だが、中央付近からは東方向に向かって4度の傾斜を持つ。柱穴は12本検出されている。いずれも小規模なもので主柱穴になり得るものは確認できていない。南西側コーナー部分を除き壁の直下には南西側コーナーで最大幅35cm、平均18cm程度、深さ10-21cmの刷溝が廻るが東側は流出したのか確認できなかった。カマドは検出されていない。覆土は6層に分層され自然堆積を示す。

遺物は、北西側コーナーを中心に北西側で投げこまれたような状況で、須恵器が多く、僅かながら土師器が伴って出土している。壁際では覆土上層に、住居中央付近では床面に近いレベルでの出土が見られた。

SI02 (第248図・図版第45)

SI02は南側調査区域丘陵東斜面のX75.380-75.390Y-5.410区に位置し、SI01から南に約7m離れて並ぶ。平面形は方形を呈するものであろうか、北東側コーナー部分及び西側壁を除き、大きく流出しており明瞭ではない。規模は現存部で南北約4.10m、東西約2m、主軸方向はN-20°Wを指し示す。遺構確認面下の掘り込みは最大で0.305mを測る。壁は緩やかな傾斜を持って立ち上がる。床面は南北方向にはほぼ水平であるが、東西方向は東に向かって8度の傾斜を持つ。柱穴は5箇所検出されている。この内北側コーナー付近の壁と西側壁中央部分の2箇所壁柱穴が確認されている。住居中央付近に2箇所確認されている柱穴と、北側コーナー付近の柱穴はいずれも明瞭な主柱穴になり得るものではない。床面中央付近に位置する柱穴に挟まれる部分に、不整形円形の範囲で焼土の分布が確認されている。炉とは異なるもので性格は不明である。カマド、周溝は確認されていない。

覆土は2層に分層され自然堆積を示す。遺物は北東側コーナー付近を中心に土師器細片が出土している。遺物は土師器が多く須恵器の出土量はSI01住居跡とは対照的に少ない。

(6) 掘立柱建物跡

SB01・SD01 (第247図・図版第45)

SB01は桁行3軒×梁行2軒の総柱掘立柱建物跡である。南側調査区域東斜面のX75.385-75.400Y-5.405-5.415区に位置し、東に向かう急斜面が傾斜を緩める変換点に構築されている。遺構は15.5度に傾斜する斜面を大き

く削り取って平坦部を確保し、削り取った部分の直下には水切りの溝SD01を掘っている。

建物の長軸はN-5°-Wでほぼ南北方向を示す。柱間は桁行2.4+2.4+1.8m (7.9+7.9+5.9尺)、梁行1.8+1.8m (5.9+5.9尺) でほぼ等間隔になる。各柱穴の平面形は直径25cm前後の円形、若しくは長楕円形が主体であるが、10では直径52cmの不整形形となっている。掘り込みは東柱の7で最も浅く、標高59.51m、10で最も深く59.21mを測り全体には一定ではない。水切りの溝SD01は建物の桁行方向に平行に掘り込まれ、建物が途切れる南北両端は緩やかに東側に回り込むように続いている。溝の幅は42~20cmで掘り込みの深さは最大で13cmを測る。

その他に建物群として、配置が確認できなかったピット群がSB01周辺に多数確認されている。

遺物はSB01の柱穴内からの出土はなかったが、水切り溝から土師器と須恵器が少量出土している。

SB02 (第248図)

SB02は桁行3軒×梁行不明の掘立柱建物跡である。北側調査区域丘陵東斜面のX75.20Y-5.405-5.395区に位置し、東に向かう緩斜面に等高線に平行するように構築されている。斜面を若干削り取って平坦部を確保し、壁の立ち上がり部分には水切りの溝を掘っている。長軸方向はほぼN-53°-Eを示す。北西側山よりの4本と南東側の東側1本の5本が確認されているが、谷側の柱穴は確認されていない。傾斜の状況から流出した可能性は少なく、掘り込みを持たない柱が設置されていた可能性がある。確認された柱間は桁行2.3+2.3+2.3m (7.6+7.6+7.6尺)、梁間2.2m (7.3尺) を測る。遺物は出土していない。

(7) 溝

SD01 SB01掘立柱建物跡に付随する遺構として前項で説明を行なった。

SD02 (第248図)

SD02はX75.390-75.400Y-5.405区に位置する。南側調査区域の東に向かって傾斜する緩斜面地に、等高線に沿うように掘り込まれるもので、走行方向も真北方向と一致している。重複する遺構はないがSK03に近接している。溝の幅は0.42-0.13m、深さ0.02-0.13m、全長5.92mを測る。溝の底面は、南側に向かって僅かながら傾斜するもので、南端と北端では標高は19cmの比高差がある。南側先端部分は、傾斜方向の東側に緩やかに曲がって途絶える。覆土は炭化物を微量に混入する灰褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SD03 (第248図)

SD03はX75.380Y-5.405区に位置する。SD02同様、南側調査区域の東に向かって傾斜する緩斜面地に、等高線に沿うように掘り込まれるもので、走行方向は真北方向と一致しながらも若干弓なりに反っている。重複する遺構はないがSI02に近接している。溝の幅は0.38-0.50m、深さ0.08-0.18m、全長2.6mを測る。溝の底面は南側に向かって僅かながら傾斜するもので、南端と北端では標高は最大で11cmの比高差がある。走行方向の一致よりSD02と同一の溝、若しくは同じ目的で掘られた遺構の可能性がある。覆土は黒褐色土の単層で炭化物を微量に混入する。遺物は出土していない。

(8) 穴

SK01 (第245図)

SK01はX75.423-75.428Y-5.412-5.416区に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸方向を北西から南東方向に持ち、等高線に対し斜め方向の掘り込みになる。谷側になる南東コーナー側は流出している。確認された遺構の長軸方向は4.48m、短軸方向でおよそ2.39m、遺構確認面からの掘り込みは北側壁の最深部で0.36mを測る。床面は南及び東方向に向かって緩やかに傾斜する。北及び西側に確認された壁は緩やかに立ち上がる。覆土は9層に分層され自然堆積を示す。全体に炭化物と焼土が混入する。

S-01炭焼窯の前庭部と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。覆土及び位置関係より、同炭焼窯跡の前庭部

関連の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

SK03 (第248図)

SK03はX75.395Y-5.405区に位置しSD02の東側に近接する。重複関係では小ピットがSK03を切っている。平面形は長円形を呈する。規模は直径1.23m、短軸方向で1.02m、遺構確認面からの掘り込みの深さは0.27mを測る。床面はほぼ平坦で標高は58.12mを測る。北及び西側に確認された壁は緩やかに立ち上がる。覆土は4層に分層され自然堆積を示す。炭化物と焼土粒子を混入する。遺物は覆土中に須恵器を主体に土師器等の細片が出土している。

SK04 (第246図)

SK04はX75.385Y-5.405区に位置する。SI01の南西側に近接し重複する遺構はない。平面形は卵形を呈し長軸方向を南北方向に持つ。谷側になる東側壁は流出している。規模は長軸方向で1.11m、短軸方向で0.94m、遺構確認面からの掘り込みは東壁よりの最深部で0.25mを測る。床面はほぼ平坦で標高は59.27mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。覆土中より土師器を主体に少量の遺物が出土している。

SK30 (第246図)

SK30はX75.375Y-5.400区の調査区内の南南東に位置する。また、SK31と接しSI02の東側に近接する。重複する遺構はない。遺構は直径0.59mの円形を呈する。断面形は鍋底状を呈し遺構確認面からの掘り込みの深さは0.20m程で、床面は南東方向に傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層され自然堆積を示す。焼土粒子及び炭化物の混入が見られる。遺物は覆土第2層中に土師器等の細片が出土している。

SK31 (第246図)

SK31はX75.375Y-5.400区の調査区内の南南東に位置する。また、SK30と接しSI02の東側に近接する。重複する遺構はない。遺構は0.42×0.37mの不整形円形を呈する。断面形は鍋底状を呈し確認面からの掘り込みの深さは0.12~0.15m程で、床面は南東方向に傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は2層に分層され自然堆積を示す。炭化物をごく微量混入する。

SK41 (第246図)

SK41は北側調査区域の北東端部X75.430Y-5.390区で検出された。SK42の北西側に近接する。長軸方向をN-81°Eに持ち、等高線に対し斜め方向の掘り込みになる楕円形の穴である。規模は長軸方向1.05m、短軸方向0.79m、確認面からの掘り込みは北側の壁よりの最深部で0.42mを測る。床面はほぼ平坦である。壁はいずれも垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

SK42 (第246図)

SK42は北側調査区域の北東端部X75.430Y-5.390区で検出された。SK41の南東側に近接する。長軸方向をN-33°Wに持ち、等高線に対し斜め方向の掘り込みになる北西側に尖る卵形の穴である。規模は長軸方向2.42m、短軸方向1.63m、遺構確認面からの掘り込みは北側の壁よりの最深部で0.405mを測る。床面はほぼ平坦である。壁はいずれも垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

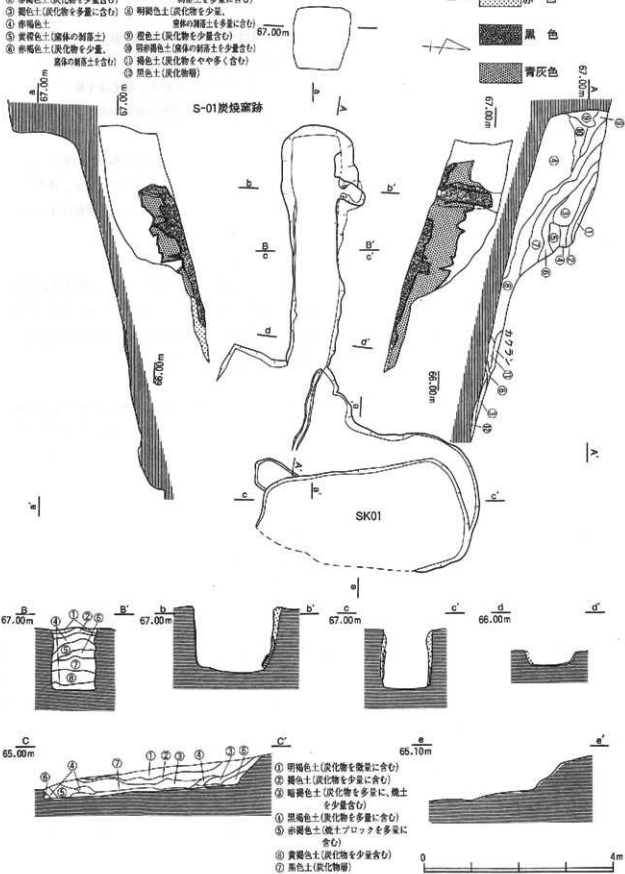
(9) 遺物包含層・北側調査区ピット群 (第249図)

遺物包含層・ピット群は、北側調査区域のX75.420~75.430Y-5.390~5.400区で検出された。遺物の集が見られた為に、当初住居跡としてSI番号を付けて調査を進めたが、壁の立ち上り・床面等が確認されず、遺物包含層と変更したものである。同遺物包含層内からは若干のしみ状の落ち込みが確認されており、これもピット群として捉えている。

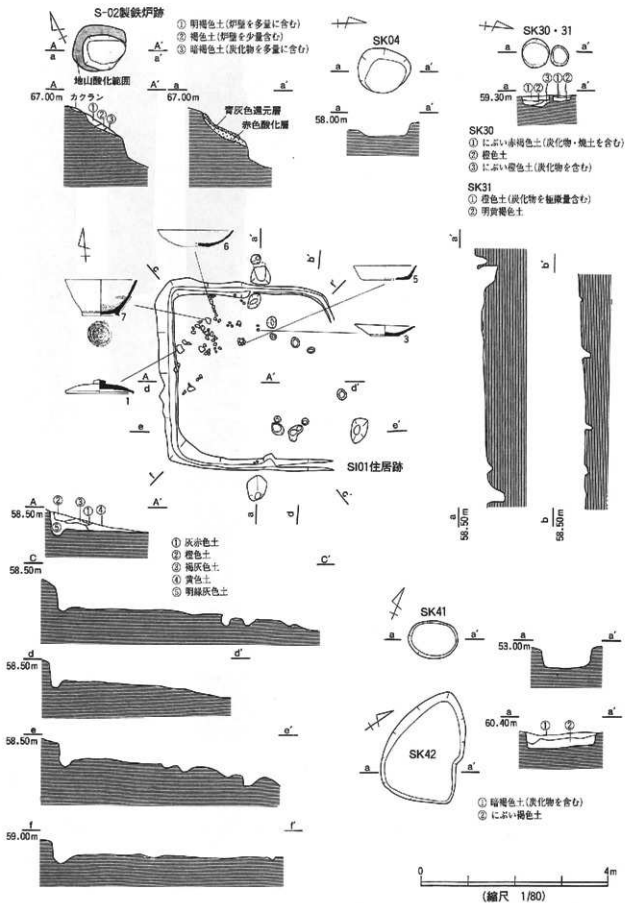
遺物の分布していた範囲は標高60~61mの南東側に向かう緩斜面で、半径5.5m程の範囲に出土しており、その中でも特に集中する部分も3箇所程見られる。遺物は須恵器と土師器があり、須恵器は杯蓋・杯が13点出土している。

- ① 黄褐色土(炭化物を多量に含む)
- ② 赤褐色土(炭化物を少量含む)
- ③ 藍色土(炭化物を多量に含む)
- ④ 赤褐色土
- ⑤ 黄褐色土(炭体の割落土)
- ⑥ 赤褐色土(炭化物を少量、炭体の割落土を含む)
- ⑦ 明赤褐色土(炭化物・炭体の割落土を多量に含む)
- ⑧ 明褐色土(炭化物を少量、炭体の割落土を多量に含む)
- ⑨ 暗褐色土(炭化物を少量含む)
- ⑩ 明赤褐色土(炭体の割落土を少量含む)
- ⑪ 褐色土(炭化物をやや多く含む)
- ⑫ 黒色土(炭化物)

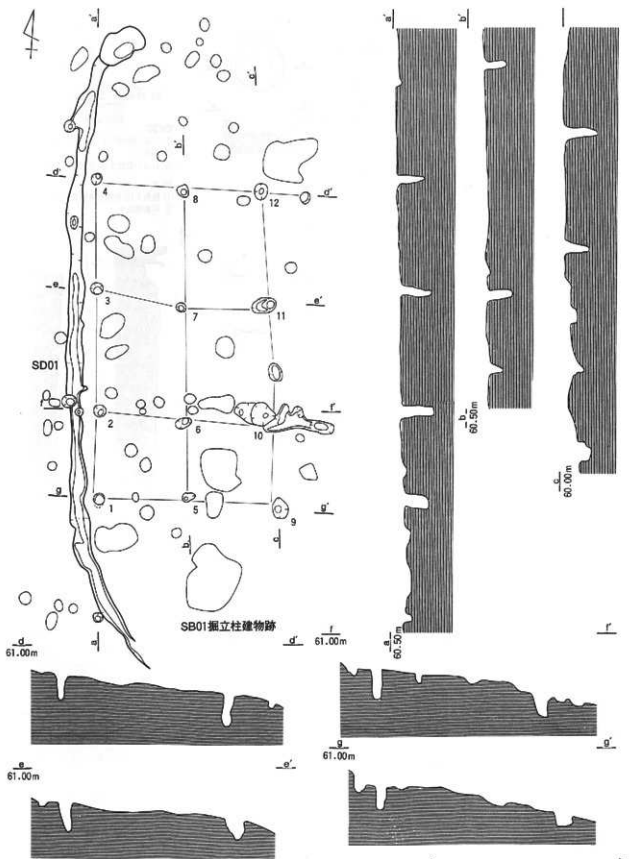
- 壁面 赤色
- 黒色
- 青灰色



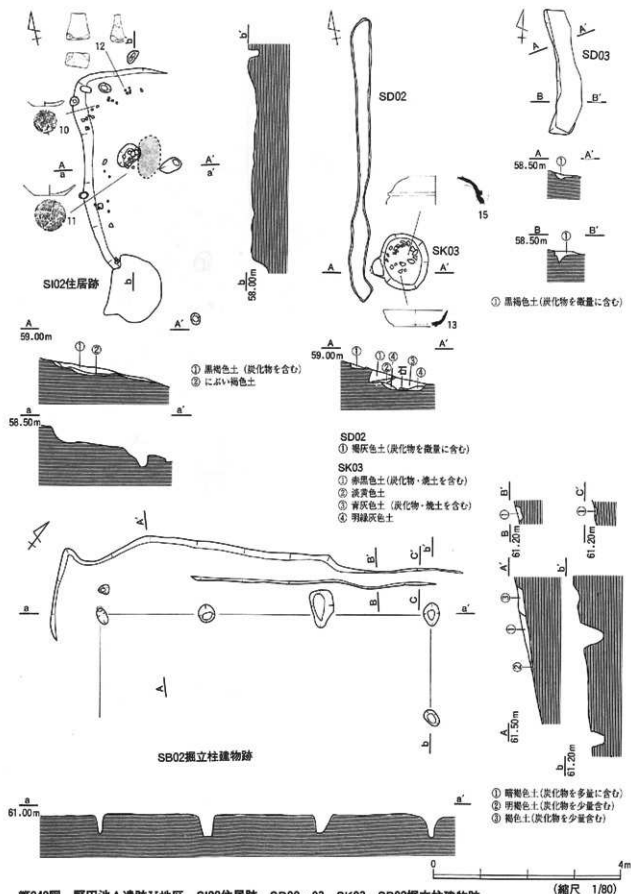
第245図 野田池A遺跡V地区 S-01炭焼窯跡、SK01



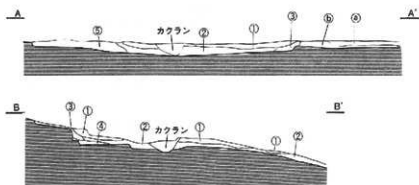
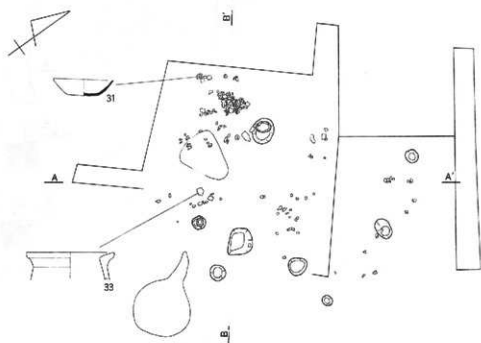
第246図 野田池A遺跡V地区 S-02製鉄炉跡、SI01住居跡、SK04・30・31・41・42



第247図 野田池A遺跡V地区 SD01、SB01獨立柱建物跡



第248図 野田池A遺跡V地区 SI02住居跡、SD02・03、SK03、SB02掘立柱建物跡



遺物包含層

- ① 灰褐色土(炭化粒を多量に含む)
- ② 灰褐色土

- ① 黒褐色土(炭化粒子を多量に含む)
- ② におい褐色土(焼土を含む)
- ③ におい褐色土(焼土を少量含む)
- ④ 褐色土(焼土粒子・炭化物共極微量含む)
- ⑤ 褐色土



第249図 野田池A遺跡V地区 遺物包含層北側調査区ピット群

00 出土遺物 (第255-256図33・図版第99)

1-10はSI01から出土した須恵器である。1・2は杯蓋で扁平な鈕を有す。2は天井部外面に回転ヘラ削りが施される。3-9は杯で、3は口縁部径に対して底径の小さな形状を呈し回転糸切り無調整である。4は口縁部から体部は直線的に立ち上がる。5・6は回転糸切りの後に高台が付される。7は口縁部径に対して底径の大きな形状を呈す。8は口縁部径に対して底径の小さな形状を呈す。9は内面体部下半から見込みにかけて削りが施される。10は長甕で、胴部外面にカキ目が施される。

11-14はSI02からの出土である。11-13は土師器杯で、11は全体に摩滅がひどく整形は不明。12・13の底部は回転糸切り無調整である。14は砥石で全体に削痕が認められる。

15-17はSK03出土の須恵器である。15は杯で口縁部から体部は直線的に立ち上がる。16は杯蓋で重みが著しい。17は双耳壺で板状の耳が付き、全体に火膨れが著しい。

18はSK04出土の須恵器杯で底部は回転ヘラ削りである。19はSD01出土の土師器杯で底部は回転糸切り無調整である。20は遺跡内表探の須恵器長甕で口縁部外面が黒色に変色している。

21-33は包含層出土で、21-31は須恵器、32・33が土師器である。21-25は杯蓋で21は扁平な鈕を有す。22は天井外面に回転ヘラ削りが施されている。23は扁平な鈕を有す。24は大きく歪んでいる。25の口縁部は折り曲げられている。26-28は杯Bで体部から口縁部は直線的に開いている。29-31は杯Aで底部は回転ヘラ削りである。32は杯で底部は回転糸切り無調整である。33は甕で極めて厚い造りである。 (肥田・大賀)

30 野田池A遺跡VI地区

・所在地 小杉町山本字野田11-1外

(1) 立地 (第237・250図)

VI地区は、樹枝状に小さな谷が延びて形成される丘陵部中段から裾部にかけての西面に立地し、背面には野田池A I・III・V地区が所在する。野田池の北西辺までの距離は約30mを測り、遺跡の広さは東西長約30m、南北長約40mを有し、標高は58.5~65.0mである。

(2) 遺構と遺物

遺構の分布状況は、標高58.0~58.5mにかけては住居跡1軒が営まれ、その東方の標高60.0~64.0mにかけては炭焼竈跡1基と壱型製鉄炉跡1基が構築されていた。穴は4基が確認されており、1基(SK01)は壱型製鉄炉の北脇に位置し、他は住居跡を囲むように標高57.0~60.0mにかけて構築されていた。

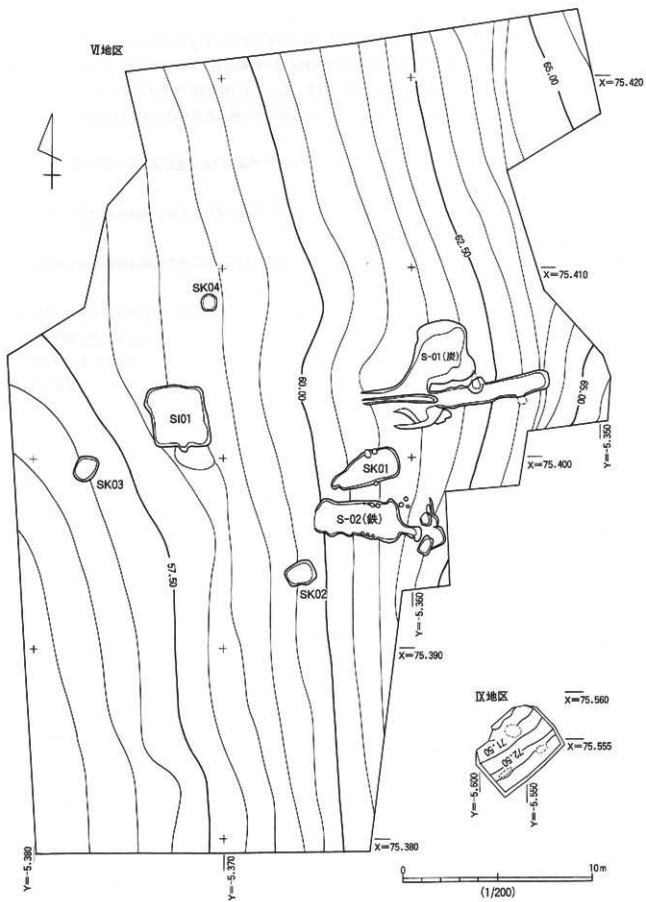
遺物は、住居跡より少量の土師器と須恵器が整理箱で3箱、壱型製鉄炉より鉄滓が整理箱で6箱出土している。

(3) 住居跡

SI01 (第251図・図版第46)

SI01はX75.401~75.404Y-5.374区に位置し、南壁の約3/4程を掘削穴が浅く切り込んでいる。規模及び平面形は、東西長2.70m、南北長2.94m、床面積7.93㎡、深さ0.25mの方形で、長軸方位はN-6°-Wを指向する。

カマドは西壁北より(カマド1)と南壁中央部(カマド2)に付設されており、2基とも天井部・袖部は遺存していない。カマド1は燃焼部が壁と壁のライン上に位置し、掘り方は径0.90m、深さ0.15mを測り、断面形は皿状となる。煙道は壁より0.20m程掘り込まれ高い角度で立ち上がる。カマド2は燃焼部が壁と壁のライン上に位置し、掘り方は径0.40m、深さ0.13mを測り、断面形は皿状となる。煙道は壁より0.50m程掘り込まれ、平面形は「U」字状となる。袖部は遺存していなかったが、煙道部の近くより袖芯に使用されたと考えられる河原石が確認されている。周溝は、東壁中央部と北東隅及び中央部南壁よりに確認されており、幅0.15~0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は4層に分層可能な自然堆積で、各層には炭化材が混入している。この炭化材は、SI01の西方13m地点に構築されている



第250图 野田池A遺跡VI・IX地区遺構配置図

S-01炭焼窯跡に起因するものと判断される。出土遺物には、土師器寛・須恵器杯蓋・杯・甌・長頸瓶がある。

(4) 炭焼窯跡

S-01 (第253図)

S-01はX75.403Y-5.352-5.362区にかけて位置し、等高線に直交する方向に構築された半地下式の炭焼窯跡で、遺構確認面の土層には廃絶後に堆積した褐色土質土が0.3-0.4mの厚さで覆っていた。

窯体の全長は5.76mであり、床面幅は奥壁で1.00m、焼成部中程で0.90m、焚き口部で0.70mを測り、奥壁に向うほど幅を増す。天井部は遺存していないが遺構確認面から床面までの深さは、奥壁で1.80m、焼成部中程で1.00m、焚き口部で0.60mを測り、奥壁側に向い深くなる。床面の傾斜角は奥壁付近で17度、焼成部中程で15度、焚き口付近で4度を測り、奥壁に向い勾配が増している。排水溝は焚き口から前庭部にかけて設けられ、現存長3.95m、幅0.20-0.30m、深さ0.10mを測る。

煙出しは両側壁に各1基が付設されており、東壁の煙出しは吸込み口付近で崩落が著しい。西壁に付設された煙出しは、吸込み口が床面より0.10mの高さで設けられ、平面形は一辺が0.40m程の略方形となる。開口部は側壁より0.30m程離れており、平面形は一辺が0.35mの略方形となる。東壁に付設された煙出しは、開口部が側壁より0.45m程離れており、平面形は一辺が0.30mの略方形となる。焚き口は両側に鉄落を配し幅0.50m程に狭めている。

窯体内の奥壁面と側壁面の色調は、奥壁とその周辺は崩落が著しく不明であるが、西側壁の煙出し付近では黒色に変色し、焚き口付近と側壁上端付近では赤く酸化している。両側壁面は基本的に青灰色に還元しており、床面は弱く青灰色に還元している。また、床面を断ち割った結果、床面は1面のみであった。

窯跡内の埋土は、大別すると床面上0.20-0.30mは天井部内面と側壁の崩落物が主体となり、その上層には天井部外面の褐色土と側壁の崩落物、更に焼土ブロックや炭化材を含んだ層が複雑に堆積している。

前庭部は窯体の主軸を中心とした場合、西に狭く東に広く構築されており、焚き口から排水溝が設けられている。前庭部全体の規模は不明瞭であるが、現存規模は長軸5.90m、短軸2.30mで、焚き口前での掘り込みの深さは0.65mを測る。

前庭内の埋土は、大別すると床面上0.20-0.35mは窯体内の炭化層と灰層が順に堆積し、その上には遺構外からの流れ込みと考えられる褐色土や明黄褐色土が堆積している。土器や土製品の出土はなかった。

(5) 製鉄炉跡

S-02 (第252図・図版第47)

S-02はX75.396Y-5.358-5.366区にかけて位置し、等高線に直交するように構築された堅型製鉄炉である。遺構の配置としては、S-01との距離はSK01を挟んで南側6m地点に位置している。炉跡は炉体上部を欠くものの、フイゴ座跡・炉体・排滓溝が確認されている。

フイゴ座跡は、方形を基調としながらも不定形な掘り込みの中に、左右対称位置に各フイゴ座を配するが、中央付近に有るであろう溝跡(軸木痕)は検出されていない。フイゴ座跡は平面形が略長方形を呈し、規模は長軸1.95m、短軸0.65mを測る。外端は深く掘り込まれ、現況で8度の傾斜面を造り出す。

炉体は隅丸の長方形を呈し、床面での数値は長軸0.65m、短軸0.35mで、開口部での数値は長軸1.10m、短軸0.45mを測る。フイゴ座側の壁面及び床面は、酸化して赤くなり、他は還元して青灰色となる。埋土は2層に分層され、床面直上に厚さ0.15mの炭化層、その上に崩落した炉体片を含む褐色土層が堆積している。

前庭部と排滓溝の区別は定かではないが、傾斜変換点を境として考えた。それによる前庭部は、床面での数値が幅1.90m、長さ0.75m、傾斜角19度を測り、断面形は皿状となる。

排滓溝は前庭部の延長として造られており、床面での数値は幅1.55-1.65m、傾斜角15度を測り、断面形は皿状と

なる。側壁隙には対をなす小穴が近接して各3基設けられており、規模は径0.15～0.25m、深さ0.19～0.25mの範疇にありいずれも内傾している。これらは柱穴として考えられるが用途は不明である。

土器や土製品の出土は無かったが、排滓溝とその下方から鉄滓が整理箱で6箱程出土している。

(6) 穴

穴は4基が確認されている。その内SK02～04は焼壁穴であり、底面直上に層厚0.10～0.25mの炭化層が堆積し、床面や壁面が若干ではあるが赤褐色に酸化している。土器・土製品・鉄滓の出土はなかった。

SK01 (第252図)

SK01はS-02の排滓溝の北脇にあたるX75.400Y-5.360～5.365区に位置する。平面形は西側部分が不定形となるが基本的に長方形を基調とし、長軸方向はN-77°-Eとなる。規模は長軸3.75m、短軸1.65m、深さ0.15mを測り、底面は平坦で24度の傾斜角を有する。中央付近の側壁には、南壁に1基と北壁に2基の小穴を有し、規模は径0.20～0.45m、深さは0.15m前後を測る。埋土は焼土ブロックと少量の炭化粒子を含む単層であり、底面や壁面には被熱等による変化は認められない。

SK02 (第252図)

SK02はX75.394Y-5.374区に位置し、標高59.50mの斜面に築かれている。平面形は長方形を呈し、長軸方向はN-67°-Eとなる。規模は長軸1.65m、短軸1.25m、深さ0.12mを測り、底面は平坦で25度の傾斜角を有する。埋土はオリブ黒色の単層で、多量の炭化粒子を含む。

SK03 (第252図)

SK03はX75.399～75.400Y-5.377区にかけて位置し、標高57.0mの斜面に築かれている。平面形は隅丸の長方形で、長軸方向はN-26°-Eとなる。規模は長軸1.40m、短軸0.95m、深さ0.38mを測り、底面は平坦かつ水平に構築されている。壁は垂直に近く立ち上がり、西壁の大半を欠いている。埋土は2層に分層可能な自然堆積で、上から順に黄褐色土、黒色炭化層が堆積している。

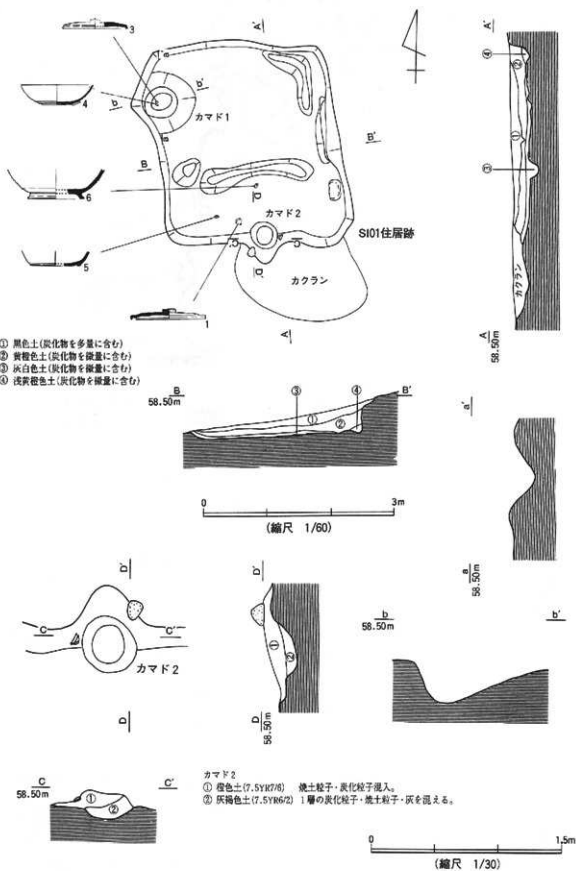
SK04 (第252図)

SK04はX75.408Y-5.371区に位置し、標高58.5mの斜面に築かれている。平面形は隅丸方形で、底面に溝状の落ち込みを有する。長軸方向はN-1°-Eで、ほぼ等高線に平行する。規模は長軸0.90m、短軸0.75m、深さ0.15～0.20mを測り、底面はほぼ平坦で地形の傾斜角に沿っている。底面に掘り込まれた溝状の落ち込みは、長さ0.53m、幅0.10～1.50m、深さ0.13mを測る。埋土は3層に分層可能な自然堆積で、上層から浅黄色土、黒色炭化層が順に乗る。

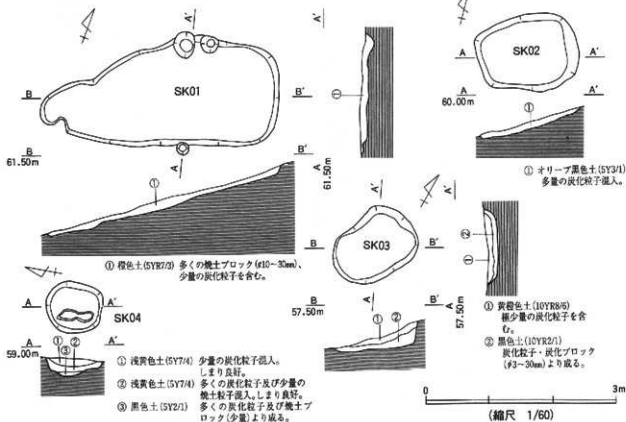
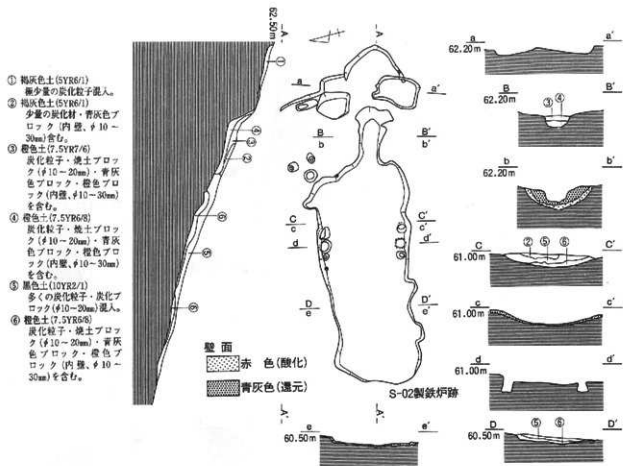
(7) 出土遺物 (第256図・図版第99)

1～10はSI01の出土遺物で、1～9は須臾器、10は土師器である。1～3・8は杯蓋で1は扁平なつまみを有し、2は天井外面に回転ヘラ削りが施される。4は杯Aで底部は回転糸切り無調整、体部下端に回転ヘラ削りを施す。8は天井部が扁平で回転ヘラ削りが施される。5・6は杯Bで5は高台が低く、6は大型で高台は高く端面は両側で接地する。7は甌で底面に小孔が認められる。9は長頸甌で細長い頸部に大きく外反する口縁部を有する。10は甕で口縁は「く」の字状に外反し、内面にハケメを施す。

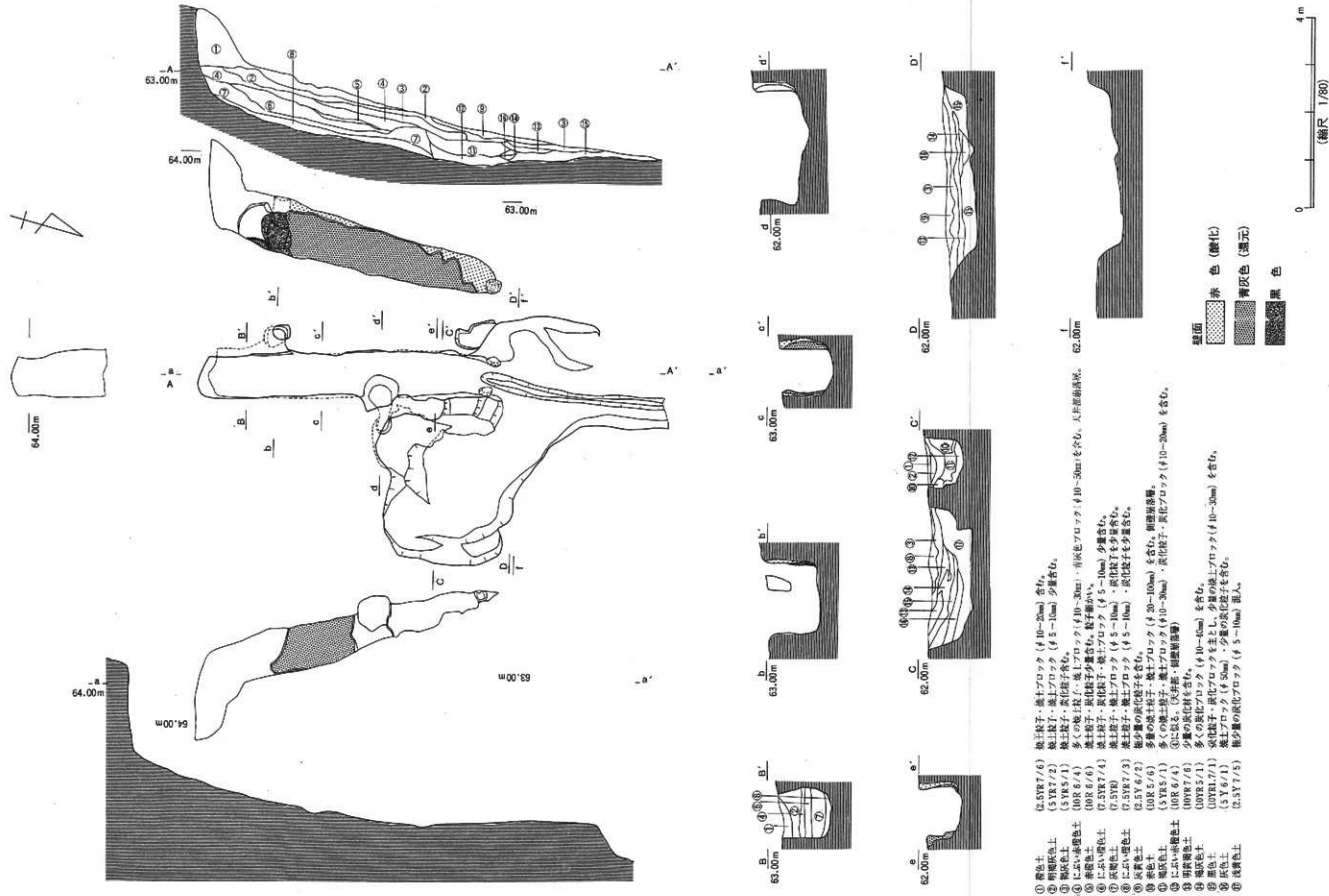
(肥田・桐谷)



第251図 野田池A遺跡VI地区 SI01住居跡、カマド



第252図 野田池A遺跡VI地区 S-02製鉄炉跡、SK01~04



- ① 赤褐色土
- ② 黒褐色土
- ③ 赤土
- ④ 赤褐色土
- ⑤ 赤褐色土
- ⑥ 赤褐色土
- ⑦ 赤褐色土
- ⑧ 赤褐色土
- ⑨ 赤褐色土
- ⑩ 赤褐色土
- ⑪ 赤褐色土
- ⑫ 赤褐色土
- ⑬ 赤褐色土
- ⑭ 赤褐色土
- ⑮ 赤褐色土
- ⑯ 赤褐色土
- ⑰ 赤褐色土
- ⑱ 赤褐色土
- ⑲ 赤褐色土
- ⑳ 赤褐色土
- ㉑ 赤褐色土
- ㉒ 赤褐色土
- ㉓ 赤褐色土
- ㉔ 赤褐色土
- ㉕ 赤褐色土
- ㉖ 赤褐色土
- ㉗ 赤褐色土
- ㉘ 赤褐色土
- ㉙ 赤褐色土
- ㉚ 赤褐色土
- ㉛ 赤褐色土
- ㉜ 赤褐色土
- ㉝ 赤褐色土
- ㉞ 赤褐色土
- ㉟ 赤褐色土
- ㊱ 赤褐色土
- ㊲ 赤褐色土
- ㊳ 赤褐色土
- ㊴ 赤褐色土
- ㊵ 赤褐色土
- ㊶ 赤褐色土
- ㊷ 赤褐色土
- ㊸ 赤褐色土
- ㊹ 赤褐色土
- ㊺ 赤褐色土
- ㊻ 赤褐色土
- ㊼ 赤褐色土
- ㊽ 赤褐色土
- ㊾ 赤褐色土
- ㊿ 赤褐色土

黒色
 黒灰色 (赤化)
 赤色 (赤化)
 赤褐色

0
 4 m
 (縮尺 1/80)

① 赤褐色土
 ② 赤褐色土
 ③ 赤褐色土
 ④ 赤褐色土
 ⑤ 赤褐色土
 ⑥ 赤褐色土
 ⑦ 赤褐色土
 ⑧ 赤褐色土
 ⑨ 赤褐色土
 ⑩ 赤褐色土
 ⑪ 赤褐色土
 ⑫ 赤褐色土
 ⑬ 赤褐色土
 ⑭ 赤褐色土
 ⑮ 赤褐色土
 ⑯ 赤褐色土
 ⑰ 赤褐色土
 ⑱ 赤褐色土
 ⑲ 赤褐色土
 ⑳ 赤褐色土
 ㉑ 赤褐色土
 ㉒ 赤褐色土
 ㉓ 赤褐色土
 ㉔ 赤褐色土
 ㉕ 赤褐色土
 ㉖ 赤褐色土
 ㉗ 赤褐色土
 ㉘ 赤褐色土
 ㉙ 赤褐色土
 ㉚ 赤褐色土
 ㉛ 赤褐色土
 ㉜ 赤褐色土
 ㉝ 赤褐色土
 ㉞ 赤褐色土
 ㉟ 赤褐色土
 ㊱ 赤褐色土
 ㊲ 赤褐色土
 ㊳ 赤褐色土
 ㊴ 赤褐色土
 ㊵ 赤褐色土
 ㊶ 赤褐色土
 ㊷ 赤褐色土
 ㊸ 赤褐色土
 ㊹ 赤褐色土
 ㊺ 赤褐色土
 ㊻ 赤褐色土
 ㊼ 赤褐色土
 ㊽ 赤褐色土
 ㊾ 赤褐色土
 ㊿ 赤褐色土

① 赤褐色土
 ② 赤褐色土
 ③ 赤褐色土
 ④ 赤褐色土
 ⑤ 赤褐色土
 ⑥ 赤褐色土
 ⑦ 赤褐色土
 ⑧ 赤褐色土
 ⑨ 赤褐色土
 ⑩ 赤褐色土
 ⑪ 赤褐色土
 ⑫ 赤褐色土
 ⑬ 赤褐色土
 ⑭ 赤褐色土
 ⑮ 赤褐色土
 ⑯ 赤褐色土
 ⑰ 赤褐色土
 ⑱ 赤褐色土
 ⑲ 赤褐色土
 ⑳ 赤褐色土
 ㉑ 赤褐色土
 ㉒ 赤褐色土
 ㉓ 赤褐色土
 ㉔ 赤褐色土
 ㉕ 赤褐色土
 ㉖ 赤褐色土
 ㉗ 赤褐色土
 ㉘ 赤褐色土
 ㉙ 赤褐色土
 ㉚ 赤褐色土
 ㉛ 赤褐色土
 ㉜ 赤褐色土
 ㉝ 赤褐色土
 ㉞ 赤褐色土
 ㉟ 赤褐色土
 ㊱ 赤褐色土
 ㊲ 赤褐色土
 ㊳ 赤褐色土
 ㊴ 赤褐色土
 ㊵ 赤褐色土
 ㊶ 赤褐色土
 ㊷ 赤褐色土
 ㊸ 赤褐色土
 ㊹ 赤褐色土
 ㊺ 赤褐色土
 ㊻ 赤褐色土
 ㊼ 赤褐色土
 ㊽ 赤褐色土
 ㊾ 赤褐色土
 ㊿ 赤褐色土

31 野田池A遺跡Ⅵ地区

・所在地 小杉町山本字野田15-11外

(1) 立地 (第237図)

Ⅵ地区は野田池A遺跡群の北西部に位置する。丘陵の頂上部分から西側に延びる尾根沿いに広がるL字状の調査区になる。他の地区は、この丘陵の南側斜面に展開する遺跡であるが本地区のみ北側斜面にあたる。丘陵頂上部分は、標高77.50m東方向に斜面を下った尾根の平坦部で標高75m、更に西方に下って標高72.0mまでが調査の対象となっている。遺構は尾根の平坦面から西方に下る斜面部に展開している。

(2) 遺構と遺物

遺構は調査対象範囲内、標高75mの尾根の平坦面から北東に向かう斜面で穴10基が検出されている。頂上部分では遺構は検出されていない。遺物は須恵器・土師器が整理箱に1箱出土している。その他特殊遺物で銅製の火焰宝珠がある。

(3) 穴

SK01 (第254図・図版第47)

SK01はX75.443~75.447Y-5.434~-5.436区で確認されている。長軸方向をほぼ南北方向とし、等高線にほぼ平行に設けられている。東側壁は流出しており構築当時の規模は不明である。遺存した部分の南北長軸方向で4.23m、東西方向は不明である。遺構確認面からの掘り込みは西側の壁よりの最深部で0.28mを測る。床面はほぼ平坦で標高は73.39mを測る。熱による土色の変化は認められない。南北及び西側に確認された壁は緩やかに立ち上がる。

西壁の直下及び床面の中央付近に2条の平行な溝が設けられている。西壁直下の溝は側溝状を呈するもので、北西コーナーを曲がって東側にも延びてL字形になる。幅は0.30m前後、深さは0.05mと浅い。中央部分の溝は、幅が0.22~0.25mで、深さは0.03~0.05m程度でやはり浅い。

覆土は8層に分層され自然堆積を示す。最上層を除く上層から下層にかけて炭化物の混入が著しく、壁際の堆積層には赤色の焼土を含んでいる。

さらに本遺構の北西側に、長軸6.92m、短軸4.63mの範囲で、不整形を呈し皿状の浅い掘り込みが確認されている。この掘り込みの内部にもまとまった炭化物の混入が認められ、本遺構及びSK01が炭焼窯にかかわる遺構の可能性を指摘しておきたい。遺物は出土していない。

SK02 (第254図)

SK02はX75.436~75.441Y-5.442~-5.448区で検出した。形状は南から北西方向に緩やかに弧を描きながら延びる溝状の遺構である。弧状に延びる遺構の長さは9.47m、幅は南側の狭い部分で0.77m、北側の広い部分では2.05mを測る。遺構確認面からの掘り込みは南西側で0.20mと深く、北東側端部では0.01m前後と急激に浅くなる。底面の標高は南西側で74.705m、中央付近で74.89m、南西側端部で74.87mとほぼ平坦で、僅かに北西方向に浅くなる。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。南東側の中央部分に小ピットが1基確認されている。規模は0.28×0.29m、深さ0.16mを測る。性格は不明である。

覆土は2層に分層され自然堆積を示す。上層の1層には少量の炭化物が混入する。遺物は須恵器・土師器で中央から南東側に向かって出土し、南東側端部でまとまりが見られた。

SK03 (第254図)

SK03はX75.448Y-5.455区に位置する。長軸方向を北東から南西方向に持つ。遺存部分の長軸方向でおおよそ0.61m、短軸方向でおおよそ0.53mの不整形円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは0.07~0.08mと浅い。底面はほぼ平坦で標高は75.12mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単層で炭化物を微量混入する。遺物は穴の西

側より土師器・須恵器が比較的まとまって出土している。

SK04 (第254図・図版第47)

SK04はX75.448Y-5.459区に位置し、直径0.73mの円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは0.01~0.02mと浅い。底面は南側に向かって緩やかに傾斜し、中央付近の標高は75.17mを測る。北及び西側に確認された壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単層であり、炭化物和焼土を主体とする。遺物は出土していない。

SK05 (第254図)

SK05はX75.442Y-5.463区に位置する。複数の穴が重複したとも考えられる。長軸方向を南西から北東にとり2.25×1.57mの隅丸長方形の遺構である。北側にやや規模の小さな長軸方向が1.50mの方形の掘り込みがこぶ状に重複する。更に南東側は壁が南側に向かって閉口しており、南西側には0.42×0.45mの小ピットが付随する。遺構確認面からの掘り込みは北側の壁よりの敷深部で0.21m、こぶ状の張り出し部分で0.15mを測る。張り出し部分と中央部分の床面の比高差は13cmで中央部分が深い。中央部分の床面の標高は74.77mを測る。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。覆土は3層に分層され自然堆積を示す。出土遺物には須恵器の杯底部、壺口縁部、土師器杯底部、鉄滓など10点ほどがある。

SK06 (第254図)

SK06はX75.442Y-5.467区に位置し、SK05の西側に近接するもので、やはり複数の穴が重複するものとも考えられる。東西両端に方形の攪乱穴があり全容は不明である。長軸方向を東西にとり、4.20×2.19mの不整楕円形を呈する。また、中央やや西寄りに0.44×0.34m、深さ0.18mの楕円形の小ピットが1孔穿たれている。遺構確認面からの掘り込みの深さは中央部分でおよそ0.20mで、南西側に0.10m程低くなる部分がひょうたん型に広がる。中央部の床面の標高は74.73mを測る。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層され自然堆積を示す。遺物は中央部分及び小ピットの中から須恵器・土師器が出土している。

SK07 (第254図・図版第47)

SK07はX75.450Y-5.488区に位置し、調査区内の最も標高の高い部分で確認されている。平面形は不整形で1.39×1.35mを測る。確認面からの掘り込みは0.45mとやや深い。底面は南側に向かって緩やかに傾斜し北側が浅い。中央付近の標高は74.88mを測る。壁は直角に立ち上がる。覆土は8層に分層され自然堆積を示す。いずれも炭化物を混入する覆土である。遺物は出土していない。

SK08 (第254図)

SK08はX75.438Y-5.440区に位置し、SK02に近接する。平面形は楕円形を呈するものと思われるが、東側が流失しており本来の形状は不明である。遺存部分での最大幅は2.0mを測る。遺構確認面からの掘り込みは西側大部分で0.12mと浅い。底面は東側に向かって緩やかに傾斜し西に浅い。中央付近の標高は74.15mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は単層で炭化物が混入する。出土遺物はない。

SK09 (第254図)

SK09はX75.439Y-5.466区に位置し、複数のピットが重複する。遺物が出土したことにより遺構と判断した。長軸0.90m、短軸0.60mを測る。底面の深さは中央が標高74.20m、西側で74.52m、東側が74.63mとなり、中央が最も深い。壁はいずれも垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層され自然堆積を示す。遺物は須恵器の壺破片が1点出土している。

SK10 (第254図) 調査の結果、遺構とは判断されず欠番となっている。

SK11 (第254図)

SK11はX75.444Y-5.442区に位置する。平面形は不整多角形で1.38×1.35cmを測る。遺構確認面からの掘り込み

は0.09mと浅い。底面は北東側に向かって緩やかに傾斜して深くなる。中央付近の標高は74.24mを測る。墩は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層され上層には少量の炭化物が混入する。遺物は出土していない。

(4) 出土遺物 (第256～257図・図版第99)

1～3・5～7はSK02からの出土で1・6・7が須恵器、他が土師器である。1は杯Bで口縁部から体部にかけては大きく外傾する。2・5は杯で底部は回転糸切り無調整、3は甕でロクロ調整を施す。6は甕で内面に回転ナア胴部外面下端に削りが施されている。7はコップ型の須恵器で、胴部下端に削りが施され底部は回転糸切り無調整である。

8～10はSK03の出土である。8は須恵器の杯蓋で天井部に回転ヘラ削りが施される。9は土師器の杯で摩滅が著しく、底部の切り離しは不明である。10は須恵器の甕で下彫れの胸部を有す。11はSK06より出土している須恵器の杯蓋で歪みが著しい。12はSK09より出土している須恵器の甕で、肩の張る胸部を有し沈線が認められる。

13～19は遺構外からの出土で、13・15～18は須恵器、14は土師器である。13は杯蓋で天井部の外面に回転糸切り痕が残る。14は杯で底部は回転糸切り無調整である。15・16は杯で底部は回転ヘラ切りである。17・18は甕で、17は口縁部片、18は胴部内面にDaの同心円タタキ、外面にHaの平行タタキを施す。19は砥石で両端部に敲打痕が認められる。4は銅製宝珠の火焔部と思われる。調査区域の最も標高の高い頂上部付近で出土している。芯部は宝珠形を呈し、そこから三方向に火焔形の板状部が加えられており、さらにこの板状部に3孔一組の小孔が存在している。

32 野田池A遺跡Ⅷ地区

・所在地 小杉町山本字野田15-10外

(1) 立地 (第237図)

Ⅷ地区は野田池の西北西側に位置するⅠ～Ⅶ地区から、尾根伝いに北西に延びる丘陵の北東端部斜面に位置する。標高はおよそ60m前後である。

(2) 遺構と遺物

遺構は須恵器窯跡2基、製鉄炉跡2基、炭焼窯跡5基、穴2基を確認している。遺構は確認後に埋め戻し保存している。遺物は須恵器・鉄滓・灰壁の細片等が採集されているが、伴出遺構は確認されていない。

(3) 出土遺物 (第258図)

1～12は須恵器である。1～4は杯蓋で1のつまみは扁平の宝珠状で天井部外面は回転ヘラ削りが行われ、2～4は口縁の口唇部が折り曲げられている。5・6は杯で5は口縁部が僅かに外反する。6の杯Aは体部から口縁にかけ外傾して立ち上がる。7は瓶頸の胴部と考えられ外面にカキ目が施される。8は横瓶で外面にカキ目が施され、内面は剥落しているが接合前の叩き目が残る。9～12は甕で、9・10は外面に平行タタキ後カキ目が施され、11・12では外面は平行タタキ、内面には同心円の当て目が施される。

33 野田池A遺跡Ⅸ地区

・所在地 小杉町山本字野田15-10外

(1) 立地 (第237図)

Ⅸ地区は遺跡の範囲としては赤坂E遺跡と近接するが、野田池Ⅶ地区と同一丘陵の北側端部斜面に位置する。北方向から入り込む浅い谷の谷頭部分にあたる。標高は71～72.5mで、北西方向に向かって緩やかに傾斜する斜面部に立地している。遺跡の範囲はX75.550～75.560Y-5.600～-5.500区である。

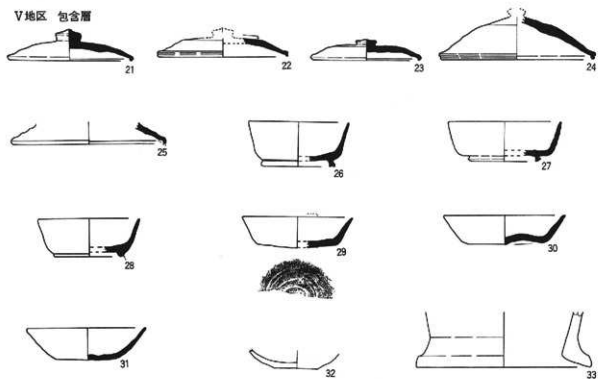
(2) 遺構と遺物

遺構は確認段階では穴3基が検出されていたが、調査の結果いずれも穴とは判断されず遺構なしとした。遺物もやはり出土しなかった。

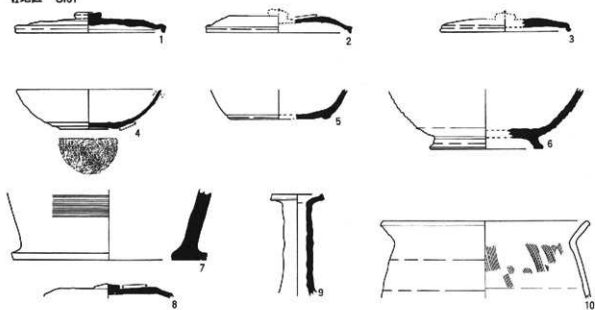


第255図 野田池A遺跡IV地区 S-08, V地区 SI01・02、SK03・04、SD01出土遺物 (20は表採)

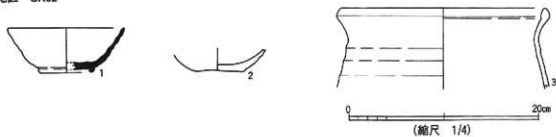
V地区 包含層



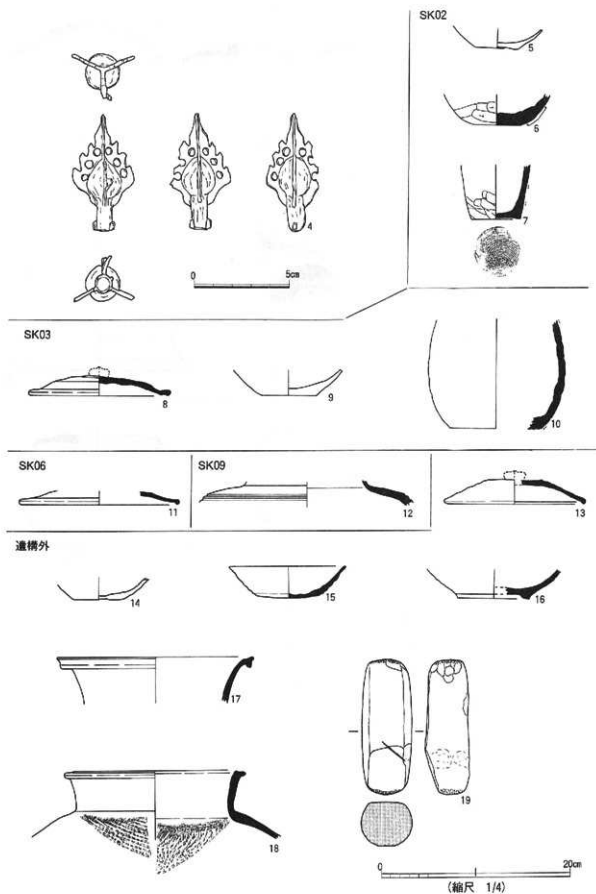
Ⅵ地区 S101



Ⅶ地区 SK02



第256图 野田池A遺跡V地区包含層, VI地区 S101, VII地区 SK02出土遺物



第257図 野田池A遺跡地区 SK02・03・06・09、遺構外出土遺物



第258図 野田池A遺跡Ⅵ地区 出土遺物

34 切石谷池C遺跡Ⅱ地区

・所在地 小杉町入会地宇水蔵場

(1) 立地 (第259図)

切石谷池C遺跡は穴ヶ谷池、栗畑池、切石谷池、福田池と連続する谷筋の、切石谷池から東方向に延びる谷に面する小さな谷沿いに展開している。周囲を標高65m以上の小高い丘陵に囲まれた盆地状の地形になる。

Ⅱ地区は谷筋の北向きの斜面に位置するもので、標高37.5~41.5mの北方向に緩やかに傾斜する斜面の裾部分に立地している。遺跡の範囲はX75.560~75.572Y-6.722~6.706区である。

(2) 遺構と遺物

遺構は調査対象地域のほぼ中央、標高38~40mの等高線に挟まれる部分から炭焼窯跡が2基確認されている。遺構は確認後に埋め戻し保存となっている。遺物は確認調査で土師器の細片が数点出土しているが、時期が判定できる資料ではなく掲載には至らなかった。

35 切石谷池C遺跡Ⅳ地区

・所在地 小杉町入会地宇水蔵場

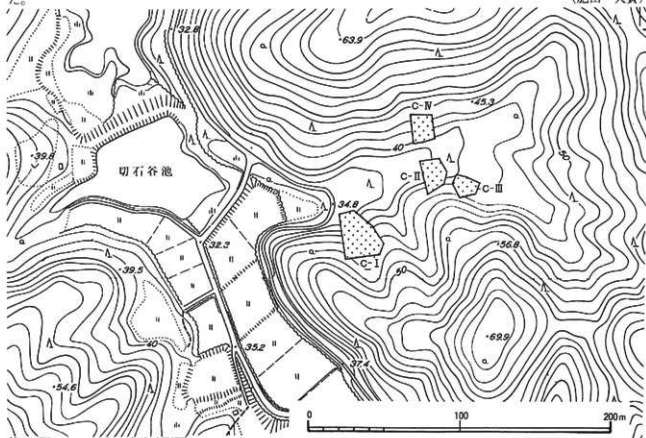
(1) 立地 (第259図)

Ⅳ地区は谷を挟んでⅡ地区対面の南向き斜面に位置する。遺跡はこの南斜面を中心に標高43.0~39.5mの間に展開している。遺跡の範囲はX75.604~75.584Y-6.730~6.710区である。

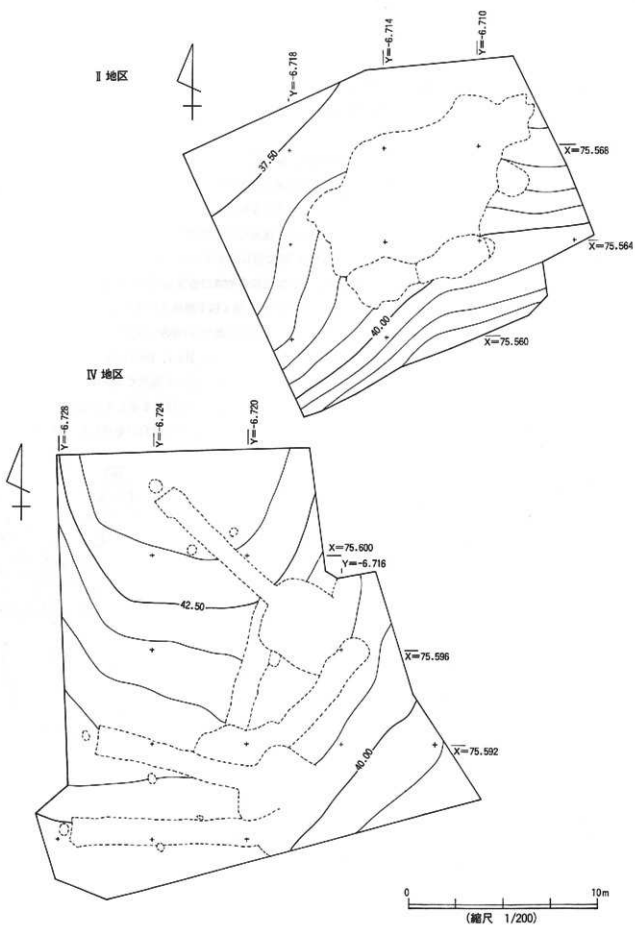
(2) 遺構と遺物

遺構は調査対象範囲内の北西側から半地下式の炭焼窯跡が5基検出されている。炭焼窯は等高線に対して直交方向になるものとはほぼ平行になるものが確認されており5基すべてが重複している。遺構は確認後に埋め戻し保存となっている。遺物は確認調査で土師器の細片が数点出土しているが、時期の判定できる資料ではなく掲載には至らなかった。

(肥田・大賀)



第259図 切石谷池C遺跡地形図(1:2500)



第260图 切石谷池C遺跡Ⅱ・Ⅳ地区地形图